週刊 YEAR BOOK

日録20世紀

1911 明治44年

7|28
平成10年7月28日発行
(毎週1回発行)第2巻第28号
¥560
講談社

"暗黒"のエリート集団「特高警察」創設!
森鷗外も常連!「カフェー・プランタン」オープン
ピカソが犯人?「モナ・リザ」盗難事件

平塚らいてうと「青鞜」創刊!

#「元始、女性は太陽であった」と高らかに宣言 菊判、134ページ、1000部でスタート

平塚らいてうと「青鞜」創刊！

▲創刊まもない明治45年1月25日、「青鞜」新年会での記念撮影。右から二人目がらいてう、手前が長沼智恵子。 「青鞜」／北川太一提供

明治四四年に創刊された「青鞜」は、二〇代の若い女性たちの手で作られた、女性解放を掲げる雑誌だった。男尊女卑の因習が根強く残っている時代の中で、「山の動く日来る」と大胆奔放に語り、行動する「新しい女」たちの出現に、世間は驚きあわて、そして激しいバッシングでこたえたのである。

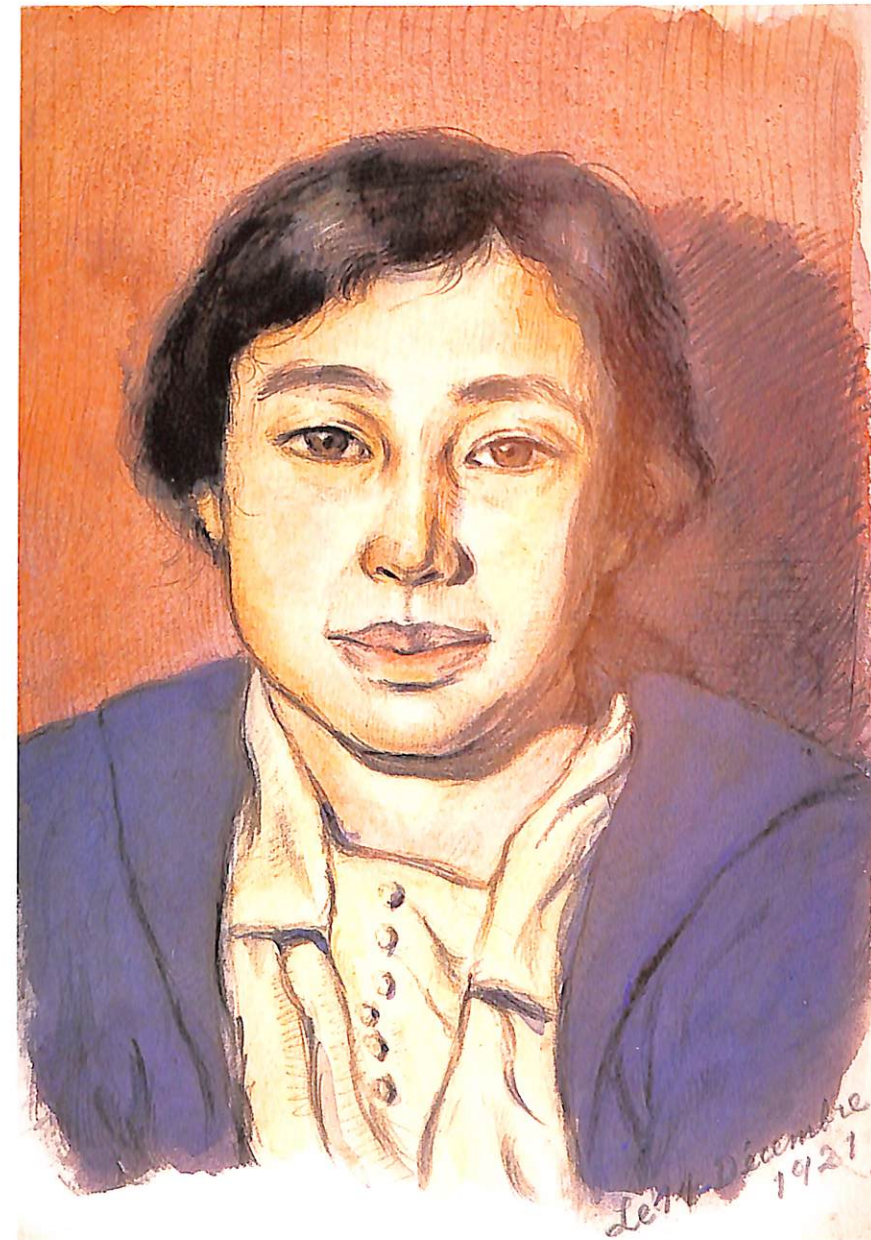
「女たちよ、目覚めよ！惰眠をむさぼるな！」

明治四四年九月一日、一冊の雑誌がうぶ声を上げた。菊判（A4判に相当）、一三四ページ。「青鞜」というタイトルのバックには、クリーム地に、ギリシャ風の横を向いた女性が描かれていた。作者は長沼智恵子（二五）、『智恵子抄』で知られる後の高村智恵子である。

創刊の辞には「らいてう」の署名で、「元始、女性は実に太陽であった」とのあまりにも有名な一文があった。そして「今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である」と続く。「らいてう」は、平塚雷鳥（二五＝本名・明）の筆名だった。同じ創刊号に与謝野晶子（……）は「そぞろごと」を寄稿、「山の動く日来る。かく云えども人われを信ぜじ。山は姑く眠りしのみ。（中略）人よ、ああ、唯これを信ぜよ。すべて眠りし女今ぞ目覚めて動くなる」と檄を寄せた。

発起人は、平塚のほか、保持研子（……）、木内錠子（……五）、中野初子（……五）、物集和子（……）の四人。いずれも……代の女性だった。物集が東京女子師範学

▲▶「新しい女」に対する偏見・悪意と発禁処分にも抗して、女性解放を掲げ続けた雑誌「青鞜」。右が創刊号。表紙絵を描いたのは長沼（高村）智恵子。

奥村敦史／日本女子大学成瀬記念館提供（左上2点、右下1点とも）

▲生涯の伴侶・奥村博史が描いたらいてうの肖像画。 奥村敦史 平凡社提供

◀日本最初の女権宣言としてあまりにも有名な「青鞜」創刊の辞、「元始女性は太陽であった」。

元始女性は太陽であつた。――青鞜發刊に際して――

らいてう

元始、女性は實に太陽であつた。眞正の人であつた。
今、女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の月である。
偖てこゝに「青鞜」は初聲を上げた。
現代の日本の女性の頭腦と手によつて始めて出來た「青鞜」は初聲を上げた。
女性のなすことは今は只嘲りの笑を招くばかりである。
私はよく知つてゐる、嘲りの笑の下に隠れたる或ものを。
そして私は少しも恐れない。
併し、どうしやう女性みづからがみづからの上に更に新にした羞恥と汚辱の慘ましさを。

―― 37 ――

©表紙　明治44年、「青鞜」創刊の頃の平塚らいてう。「青鞜」とらいてうの歩みは、日本の婦人解放運動のシンボルとなった。 大月書店提供

「元始、女性は太陽であった」と高らかに宣言
菊判、134ページ、1000部でスタート
平塚らいてうと「青鞜」創刊!

校の出身、ほかはいずれも日本女子大学出身という、上流インテリゲンチャの集まりでもあった。

また、賛助人として、長谷川時雨（三二）、与謝野晶子、国木田治子（三二＝独歩未亡人）、森志げ子（三一＝鷗外夫人）ら、当時のそうそうたる女流作家の名があった。

「青鞜」というタイトルは、一八世紀イギリスのモンタギュー邸に集った「新しい女」たちが、青い靴下を愛用していた、と噂されたことに由来する。

発行部数一〇〇〇部というこの〝ミニコミ〟誌は、平塚が趣意書の中で書いているとおり、「婦人ばかりで、婦人のための思想、文芸、修養の機関として青鞜社を起こし、雑誌『青鞜』を無名の同志婦人に開放する」ために創刊されたものだった。定価は二五銭。もりそば一杯が二銭だった時代のことである。

「婦人もいつまでも惰眠をむさぼっているときではない。早く目覚めて、天が婦人に与えてある才能を十分に伸ばさねばならない」（趣意書）とする彼女らの主張は、わずかな発行部数にもかかわらず、女性たちを中心に大きな反響を呼んだ

当時の女性をとりまく状況は、今からは想像もできないほど厳しいものだった。

女性には選挙権もなく、男には認められる戸主権（子どもの結婚の許可権、家族の居住地の決定権などまで握っていた）もなかった。「青鞜」創刊の二年前に、女子教育家懇話会という団体が「若き婦人の男子に対する心得」なるものを発表している。通称「べからず一〇カ条」と呼ばれたそれには「男と一対一で会うな、日没後は単独で外出するな、みだりに青年と文通するな、若い男女だけで散歩や遊技、娯楽をすると指弾を招く」など、現在では噴飯ものの項目が並んでいた。良妻賢母が理想的女性像とされ、世間もそれを当然と思っていたのである

そうした中で、平塚らは「服従、貞淑、忍耐、献身など女徳はもはや有り難いものではない」と公然と主張したのである

マスコミあげての「青鞜」バッシング

この女性解放の宣言を感激して受けとめた人がいる一方で、「青鞜」を蛇蝎のように嫌う発言も相次いだ。内務省の現役警保局長は新聞紙上で「連中は色欲の餓鬼である」と言い放ち、平塚らが抗議に出向く一幕もあった。そして「青鞜」やそのメンバーには「新しい女」というレッテルが貼られ、世をあげて魔女狩りのような集中砲火があびせられる。平塚は自宅に投石され、メンバーの一挙一動が面白おかしく歪曲され、新聞雑誌をにぎわせたのである。

「東京日日新聞」（現・「毎日新聞」）は明治四五年三月、「新しい女、五色の酒を飲む」とスキャンダラスに伝えた。女性だけに、記事のインパクトは強かった。だが、平塚の自伝では、当時日本橋にあった文士などの溜まり場のカフェー「鴻ノ巣」に、同人の一人が広告取りに出向き、カラフルな酒（色や比重の違う酒を順番に注いだもの）に感嘆し、吹聴したのが真相だという。飲んでもいないのに誇大に伝えられたというのだ。また、平塚らが吉原遊廓に見学のため登楼したこともかっこうの餌食となった。「青鞜の新しい女、男女同権を主張し、吉原妓楼に遊興す」となってしまうのである。

最高時には三〇〇〇部にも達した「青鞜」は、女性をめぐる各種の議論の場だった。イプセンの「人形の家」のノラが語られ、家族制度の束縛からの逃れ方や国家が語られ、セックス体験すら語られていた。活発で真摯な議論が飛びかったのである。そうした赤裸々な自己表現に対し、治安当局も無関心ではなかった。風俗紊乱、社会主義的色彩などを理由に、「青鞜」は三回の発禁処分と一回の注意処分を受ける。

編集責任者は平塚から、後に伊藤野枝に引き継がれるが、「青鞜」は、大正五年二月の無期休刊まで五二号にわたって新しい息吹を世に送り続けた。

女性史を研究する名古屋経済大学の水田珠枝教授は、

「青鞜の運動は、日本における女性の自我確立の闘いでした。モデルとして導入されたのは、一八八〇年代に欧米で登場した『新しい女』でした。青鞜の女性たちは、因習的な家族関係を崩し、新しい生き方を模索しましたが、社会からは激しい非難をあびました。しかし洋の東西、青鞜の時代、ウーマンリブの時代を問わず、いつも女性の新たな地平を開いたのは、変わっている、女らしくないと社会から指弾された女たちだったのです」

と言うのである。

▶大正3年、共同生活に入った頃のらいてうと奥村博史。奥村は5歳年下だった。

奥村敦史　平凡社提供

▼2児の出産を経て、らいてうは母性主義的な立場からの社会改革をめざすようになる。大正9年1月、新婦人協会結成に向けての集い。左端は市川房枝。

▲新婦人協会の機関誌「女性同盟」。

「青鞜」と女性をめぐる論争小史

「青鞜」は女性をめぐる問題に関する幾多の論争の場となっている。後期の伊藤野枝編集長時代には、特に活発に行われた。

彼女らに貼られた「新しい女」というレッテルは、「堕落した女」「ふしだらな女」とほぼ同義だった。その逆境の中、平塚らいてうは「自分は新しい女である」「男の便宜のために作られた古き道徳、法律を破壊しようと思っている」と敢然と主張したのだった。

「貞操」論争は、雑誌「反響」に掲載された「青鞜」メンバーの生田花世の「食べる事と貞操と」をめぐって繰り広げられた。生田は「食べるということが第一義的要求であって、自分一箇の操の事は第二義的要求であった」「ただ一時でも保護を与えてくれる一人でも持っていたら私は貞操を全うしたであろう」と主張した。これに対し安田皐月は、「どこに保護者の許に操を売る売女があろう」と痛烈に反駁した。そして「私どもの最も近くにいる女の言葉」として「何という情けなさ浅ましさであろう」と続けた。

論争は、「堕胎」や「売春」をめぐっても繰り広げられた。同じ安田の「獄中の女より男に」は、産むか産まぬかは個人の選択であることを、小説の形で語り、裁判官を嘲笑愚弄したとして「青鞜」に3回目の発禁処分をもたらした。そしてこの論争テーマは、女性が現在なお、抱え続けている課題でもある。

◀明治四五年の与謝野晶子。大正七年、晶子とらいてうは、戦後の主婦論争にも通じる〝母性保護論争〟を展開する。

予算、人員、組織の全容はいまだに不明
スパイを利用し、密室での拷問を繰り返す
“暗黒”の集団「特高」創設！

警戒にあたる警官隊。新設された特高課は、同盟罷業、爆発物、新聞・雑誌などの検閲を管掌した。

▲明治44年12月1日、東京ガス会社合併をめぐる争議に出動し、市役所前でデモの

明治四四年、特別高等警察（特高）が誕生した。台頭しつつある労働運動、社会主義者の「根絶」が目的だった。特高は残虐な拷問で、悪名をはせ、その標的は社会主義者はもとより、リベラリスト、宗教者、学者へと際限なく広がった。その存在は憲兵とともに、戦前の暗黒時代の象徴として広範な国民の怨嗟のまとなったのである。

「大逆事件」の衝撃が特高創設の引き金に

「およそ国家の現状を破壊し、社会の秩序を紊乱せんとし、（中略）国家の存在を否認せんとする者に対しては（中略）国家は自衛の道に出ざるを得ず」

明治四四年三月の第二七回議会で、平田東助内相は、こう力説した。その具体的な方策のひとつが、この年八月二一日の警視庁への特別高等課（特高）設置と、主要府県に限られていた高等警察課の全国的な設置であった。思想取締りで悪名高い「特高」が誕生したのである。

特高誕生の引き金は、前年の「大逆事件」だった。天皇の暗殺をくわだてたとして幸徳秋水（当時・三九歳）、管野すが（同・二九歳）ら二六人が逮捕され、この年一月死刑となった事件である。事件の衝撃は大きかった。桂太郎首相は、明治天皇に対し「皇国未曾有の犯罪者を出すに至」った責任をとり辞表を提出する騒ぎとなったのである。天皇は、「事件は世曲の変遷に伴い起こる余弊」だから内閣に責任はない、と却下した。

当時の日本は、本格的な資本主義の確立期だった。だがそれは、「女工哀史」に象徴される工場労働者の低賃金、長時間労働を踏み台にしていた。そして、労働者の不満が自然発生的なストライキを生み、社会主義を指導理念とした大衆的、組織的運動に成長しつつある時期でもあった。

「特別要視察人」に関するすべての“情報”をつかめ！

「桂の前任者の西園寺公望は、社会主義政党を強権的に解散させても、地下に潜行したらかえって面倒、という立場。一方、桂は、社会主義の根絶論。今は煙でも、燃えて広がったら大変、という認識に立ったのです」

と言うのは、警察の歴史に詳しい東京都立短期大学の大日向純夫教授である。

桂内閣の背後には元老で、明治官僚制の生みの親の山県有朋（七三）がいた。

「山県は明治四三年九月に『社会破壊主議論』という、社会主義絶滅を主張する意見書を提出しました。社会政策で社会主義の発生を予防し、他方、警察に強大な権限を与えて取り締まれと官僚を叱咤しました。しかも、具体的な法案まで添えた異例の文書でした」（荻野富士夫・小樽商科大学教授）

従来の高等警察が一般の政党対策を担当するのに対し、特高は、アナーキズムを含む社会主義陣営を専門に担当するセクションとして誕生したのである。

とはいえ特高の実態、全容は今にいたっても明らかではない。「個人の回想や伝記、それにアメリカ公文書館所蔵の占領軍文書がわずかな手がかり。特に初期の特高の実態はほとんど解明されていないも同然です」（前出、大日方教授）。

わずかに昭和三年当時、全国に特高課を設置した時の予算が二〇三万円だった

◀日本の社会運動の沿革と現状について、特高の側から詳述した『特高必携』。特高官僚・警察官の“弾圧マニュアル”として利用された。

▲マルクスなどの肖像が入った、平民社発行「社会主義絵はがき」。

『写真記録集 日本共産党の60年』

▶初代の警視庁特高課長・大塚惟精。栃木県、福岡県知事を歴任し、昭和四年、内務省警保局長。

▶特高創設時の内務省警保局長・有松英義。警保局は、“特高警察の元締め”と言われた。

▲治安維持法制定を推進した山岡万之助。昭和2年、内務省警保局長。

▲明治44年12月24日、堺利彦が創立した売文社の忘年会。同社は〝冬の時代〟の社会主義者の拠点となった。堺一家を囲んで、大杉栄、片山潜らの顔が見える。 近藤千浪提供

こと、昭和一八年の愛知県警の職員のうち約一一%にあたる四一九人が特高や外事担当だったこと、さらに特高課長は内務省直結で、指揮命令が一般の警察署長すら通さずにしばしば行われていたことなどが明らかになっているにすぎない。その誕生当時から、予算も、人員も、組織もまるで〝ブラックボックス〟だったのである。

特高は、翌明治四五年、大阪にも設置された。そして大正一二年以後、全国にその組織を広げていった。特高は、社会主義の根絶をめざすために「特別の技能経験を持った」もので組織された。そして社会主義者など(「特別要視察人」と呼ばれた)について、以下の項目の徹底調査を指令されていた。

氏名・称号・身分、年齢・住所・本籍、学事、経歴、前科、職業・資産・収入・生活状態、家族関係、境遇、人望、宗教、交際、相貌、技倆、性癖、嗜好、私行、思想に変化を来した動機、系統、平素の行動、購読紙誌、筆跡など——。

しかも、「手段としては合法、非合法と二つに別けられる(中略)時に虎穴に入らずんば虎児を得ざるの薄氷を踏む思ひもなしとは言へぬ」(『特高教範』)という文章が示すとおり、非合法手段も駆使された。さらに、スパイが利用され、密告者作りが組織的に行われた。鉄道、印刷所、書店との密接な連携も特高の重要な業務とされていた。要するに市民生活のありとあらゆる部分に、監視の目が光る体制だった。

設立から一〇年を経た大正末期には、特高の猛威は明らかとなる。具体的には大正一一年の日本共産党結成、一四年の治安維持法成立がエポックとなっている。昭和六年の「満州事変」以降は、酒のうえでのささいな放言が大罪に問われるなど、笑うに笑えない悲喜劇まで登場する。そして、密室での拷問で、特高は、共産党中央委員だった岩田義道(昭和七年)や作家・小林多喜二(昭和八年)を虐殺するのである。

残虐さで知られる特高幹部は、一方では戦前のエリート官僚の代表格である内務官僚の、〝出世コース〟でもあった。たとえば、昭和七年に初代の警視庁特高部長となった安倍源基は「青年官吏のうち、優秀と目されている者が(特高)課長に任ぜられた」(『思い出の記』)と書いている。

終戦時の安倍は、内相に昇進していた。特高警察は、日本の敗戦にともない、昭和二〇年一〇月一三日、GHQ(連合国総司令部)の命により廃止された。活動期間は三四年二ヵ月におよんでいた。

◀明治四四年末の東京市電ストを組織、検挙され下獄した片山潜。

女たちの肖像

〝卑しい職業〟に生涯を賭け 帝劇開場とともに五〇年!「正統派女優第一号」森律子

稲葉真弓

今では考えられないことだが、明治末期から大正初期まで、女優という職業は卑しいものとされ、軽蔑の対象だった。その女優業を「自活していくため」に選択したのが、日本の「正統派女優第一号」と言われる森律子(二〇)だった。初舞台はこの年の三月、帝劇開場公演の山崎紫紅作「頼朝」で、役柄は頼朝の妻・政子の妹・浦代姫。以後、帝劇の看板女優として君臨することになる。

まだ女優そのものが珍しい時代、彼女の存在はたちまち世の男性の関心を呼び、道や楽屋裏で待ち伏せするもの、恋文を送りつけるものなど誘惑は数知れず。一番おそろしかったのはこうした誘惑だったという。

律子は明治二三年一〇月、東京・京橋に弁護士(後に代議士)の森肇の次女として生まれた。進取の気性を持つ父親の判断で、六歳になるといきなり寄宿舎に入れられ、跡見小、跡見高等女学校ですごした。子ども時代、気に入らぬことがあると、窓のしんばり棒を振りまわしたお転婆できかん気の少女は、この頃から、結婚して家庭に入る〝女の生き方〟に強い反発を持つようになっていた。

女優志願を決意したのは、明治四一年、築地英語学校在学中のことで、川上貞奴が帝国女優養成所を開き、女子を募集しているのを新聞の広告で知ったのがきっかけだった。銚子に避暑に出かけていた彼女は、この広告を目にするやいなや天啓を受けたような衝動にかられ帰京。反対する父母を説き伏せ、第一期生になった。

女優としての苦難は、芸の道だけにあったわけではない。〝卑しい職業〟のため跡見高等女学校の同窓会名簿から名前を削除される屈辱を受け、仲のよかった弟が、姉の女優業を誹謗されたことがきっかけで自殺するという辛酸も嘗めている。

が、律子は自分の道を貫いた。女優は卑しい職業ではない。芸術家なのだ……。大正二年には芝居を学ぶため渡欧、帰国後は歌舞伎からコメディーまで幅広く活躍した。

私生活では、帝劇の重役であり劇作家である益田太郎をパトロンにし、生涯、彼以外の男性とは関係を持たなかった。

晩年の彼女は、昭和三一年小田原文化財の女舞・桐大内蔵の名跡を襲名、その直後、高血圧のために半身不随となった。一時は玉川の老人ホームに入ったが、三六年、養女の森嚇子(女優)に見とられ、七〇歳で〝女優一徹生涯〟を閉じた。

▲帝劇名物の益田太郎冠者作の喜劇で、特に精彩を放った。

勝者・敗者

突っ張りに荒技「仏壇返し」〝胃腸の弱さ〟を克服して 太刀山、天下無敵の全勝!

阿部珠樹

太刀山は胃腸が弱かった。チャンコが食えない。太れない。六尺一寸(一八五センチ)と、当時としては珍しい長身ながら、弱い胃腸のために、それを十分に生かし切れず、伸び悩んだ。

それでも何とか大関にまで番付を進めたのは、強力な突っ張りがあったからだ。別名「四十五日」。つまり〝一月半〟で相手を土俵からはじき出すというすさまじい威力だった。

明治四二年、大関に昇進する頃には、弱かった胃腸も何とか人並みになった。そして快進撃が始まった。同年夏場所の八日目から負けない土俵が続く。年二場所制の中で、明治四三年の夏場所に初優勝。成績は九勝一分け。大横綱常陸山からの世代交代を印象づける。

そして三四歳のこの年、明治四四年は太刀山の相撲が頂点をきわめた年になった。もう太刀山の進撃を止めるものは誰もいなかった。

春場所を八勝一分一預かりでものにすると、夏場所は、引き分けも預かりもない、文句なしの一〇連勝で全勝優勝を飾る。明治四二年夏場所、優勝制度が整えられて以来、引き分けも預かりもなしの全勝優勝は太刀山が初めてだった。

第一人者となった太刀山は、以前からの得意技、突っ張りに加え、時に「仏壇返し」と呼ばれる豪快な呼び戻しを見せ、満場を沸かせた。そこには胃腸が弱く、長身を持て余していた頃の、ひ弱な面影はまったくなかった。常陸山に続く明治の大横綱の誕生である。

結局太刀山は、明治四二年の夏場所八日目から、明治四五年春場所八日目まで四三連勝を飾る。

この連勝は西ノ海にストップされたが、太刀山は連勝ストップのショックなどみじんも見せず、翌日からまた白星を重ね、今度は五六連勝を記録した。土俵で見せる荒技と同様、胆力も抜きん出た豪快さを持つ、真の大横綱だった。

毎日新聞社

▲44年夏場所、新横綱で全勝優勝。中央は筆頭後援者の板垣退助。

ニュース・ファイル

1911

フォト＋日録で再現する365日

「大逆事件」で幸徳秋水らに死刑判決が下り、わずか一週間後に執行されたこの年、さまざまな社会運動を取り締まる名目で、警視庁は新たに特高警察を設置した。そして、女性解放をうたう「青鞜」や正義の味方が主人公の「立川文庫」もうぶ声をあげた。

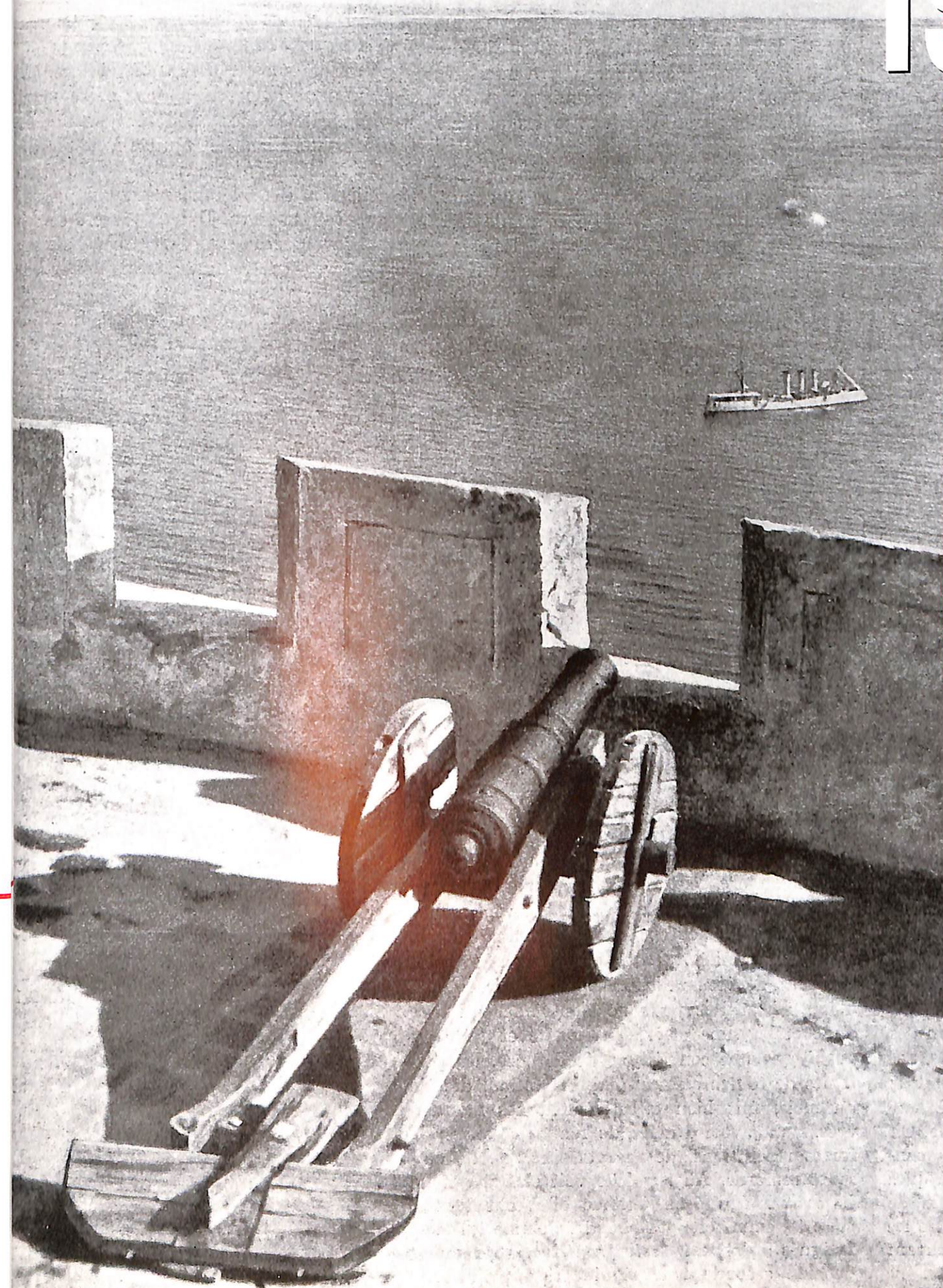
◀第2次モロッコ事件起きる(7月1日)ドイツが、南部の港・アガディールに砲艦「パンテル」を派遣。独仏間は一触即発の危機を迎えた。同地は植民地争奪戦のすえ、1905年からフランスが支配、ドイツは奪回の機会をねらっていた。

「イリュストラシオン」

1月

▲陸軍、1本杖スキー導入(1月12日)雪中での行軍の必要から、オーストリアからレルヒ少佐(写真右)を招き、新潟県高田の歩兵第58連隊14人が指導を受けた。左は堀内連隊長。

小熊和助／小熊写真館提供

▲「日本の美男子」決定(1月1日)「膨張的大日本を代表する明治の真人間」を求めて、前年「毎日電報」が募集。1等から10等までの顔を発表した。

▼有島武郎「或る女のグリンプス」発表(1月)雑誌「白樺」1月号から大正2年3月号まで連載。後に「或る女」と改題した代表作。写真の長男は、この年1月誕生。

毎日新聞社

「写真タイムス」

▲「同盟力士」解散(1月24日)給金値上げを要求、東京・新橋倶楽部に籠城した幕内力士が、協会と和解。本場所は、2月4日からようやく開催した。

▼満州(中国東北部)にペスト大流行(1月)峠を越えた4月までに、4万人以上が死亡。写真は21日、長春隔離所を視察する北里柴三郎博士(左から9人目)ら。

松坂屋提供

▶50銭で5円のお年玉(1月2日)前年開店の、名古屋・栄町いとう呉服店(現・松坂屋)が「新春宝箱」を発売。1500個の大当たりを求める人々で、店の前は長蛇の列となった。

「太陽」

明治44年1月

1(日)●日本製鋼所、営業開始。
2(月)●猪の絵偽造の年賀はがき出まわり発売中止に。
3(火)●ニーチェ『ツアラトウストラ』翻訳版、刊行。
4(水)●山川健次郎、「千里眼」の長尾郁子に初実験。
5(木)●銚子沖で漁船団が難破、一〇〇〇人行方不明。
6(金)●米国・カリフォルニア州で排日運動再発。
7(土)●「東京朝日新聞」、自転車などデザイン優秀な作品の当選広告。
8(日)●清国、ペスト対策で鼠を五銭で買い取り開始。
9(月)●逓信省、海事金融制度の調査を開始。
10(火)●農商務相、禁止海域内で操業する遠洋トロール漁業者に対し取締り強化の方針を訓告。
11(水)●京都電気(後に京都電灯)、設立。
12(木)●オーストリアのレルヒ陸軍少佐、新潟県高田で陸軍青年将校らに日本初のスキー指導行う。
13(金)●東京の石炭回漕船の船頭一五〇〇人、賃上げ要求スト(17日、一割五分増給で妥結)。
14(土)●ブダペストで日本美術展開催し大盛況。
15(日)●東京の力士五四人が分配・退職金問題で大相撲協会脱退、新橋倶楽部に籠城(23日、和解)。
16(月)●大阪の下駄職人一五〇人、賃下げに反対運動。
17(火)●大阪府、府下銀行の不正帳簿の取締りを強化。
18(水)●大審院、「大逆事件」幸徳秋水ら二四人に死刑判決(翌日一二人は無期に減刑。24日執行)。
19(木)●「読売新聞」に教科書の南北朝併立記述についての投書。
20(金)●大阪市、電力供給事業開始(九条町発電所)。
21(土)●横浜市内の質店で、刑事をよそおった男が贋金捜査と称し紙幣一八〇円を持ち逃げ。
22(日)●東京弁護士会館、東京地裁構内に開館。
23(月)●米、日本側提出の通商航海条約案につき、交渉開始に同意のむねを日本政府に回答。
24(火)●石川県鹿島郡に送電用の海底電線を敷設。
25(水)●東京美術学校から出火、本館講義室が全焼。
26(木)●桂太郎首相、政友会総裁・西園寺公望と会談し予算問題などで協力を要請(「情意投合」)。
27(金)●東京・本所のメリヤス工場で出火、一〇戸類焼。
28(土)●牧師・植村正久、「大逆事件」刑死者・大石誠之助遺族慰安会を東京・富士見町教会で挙行。
29(日)●大阪市電、上本町線の上本町二丁目―天王寺西門前間、開業。
30(月)●西田幾多郎、『善の研究』(弘道館)刊行。
31(火)●東京俳優学校、国木田独歩原作「牛肉と馬鈴薯」ほかを牛込高等演芸館で初上演。

2〜3月

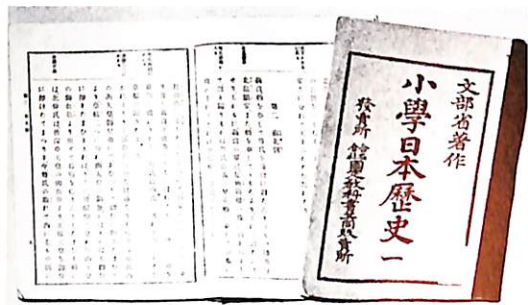
▼速達郵便始まる(2月11日)東京と東京—横浜間で実施。東京市内なら、特使(自転車)で2時間弱で配達。小包はむき出しのままでも受取人の氏名を記した木札をつければよく、窓口に弁当を持ちこんだ例もあった。

毎日新聞社

▲夏目漱石、文学博士を辞退(2月21日)文部省に「是れから先も矢張りただの夏目なにがしで暮したい」と手紙。写真は、前年に胃潰瘍を患った際に修善寺で世話になった医師との記念撮影。後列左から4人目が漱石。

▼「山田式飛行船第2号」苦闘(2月)前年、初の国産機で係留飛行に成功した山田猪三郎が、暴風に吹き飛ばされる(写真)などで難渋。5月に、やっと自由飛行に成功した。

毎日新聞社

▲三越呉服店、基礎工事(2月9日)東京・日本橋の児童博覧会跡地に、地上5階の建築計画、井戸掘りが始まった。大正3年(1914)9月に竣工。

◀▲「南北朝問題」で休職処分(2月27日)文部省が教科書の記述を、南北朝併立から南朝正統論に統一、桂内閣は危機を乗り切った。写真は問題の教科書と、処分を受けた編修官・喜田貞吉。

「グラヒック」

◀GM社がセルフスタータ採用(2月17日)高級車キャディラックに設置。従来のクランクを手でまわす方式は、強い力を要し、始動時の事故が多かった。

明治44年2月

1(水)●徳冨蘆花、一高で「謀叛論」を講演し、政府の思想弾圧を批判(新渡戸稲造校長に戒告)。

2(木)●立憲国民党代議士会、韓国併合の事後承諾案否決。

3(金)●雪で不通の新潟県高田—直江津間の電話復旧。

4(土)●国定教科書の南北朝併立の記述をめぐり、衆議院で問題化(南北朝正閏論争)。

5(日)●長野・諏訪湖の氷上でスケート選手権開催。

6(月)●東京・目黒の私立日本獣医学校、開校認可。

7(火)●前年度の米実収高は四六一三万石と発表。

8(水)●台湾精糖、神戸精糖神戸工場を買収契約。

9(木)●衆議院予算委員会、財政上の負担から鉄道広軌化計画を予算案より削除。

10(金)●東京・帝国劇場落成。全席椅子式、食堂などを設置した洋風の劇場(3月1日開場式)。

11(土)●速達郵便、東京市内および横浜間に実施。
●結核の予防撲滅めざす「日本白十字会」、結成。
●阪田久五郎が個人企業で万年筆製造を開始(セーラー万年筆の発祥)。

12(日)●神奈川県平塚で大火、三三〇戸余が全焼。

13(月)●立憲国民党議員ら、三税(織物税、塩専売税、通行税)廃止法案を衆議院に提出。

14(火)●京橋の明治屋、タバコの不始末で倉庫全焼。

15(水)●新潟中学校で生徒が教員を狙撃未遂と新聞に。

16(木)●長野・善光寺に女性死体の詰まった行李が届き騒動となる。翌月、女性の夫を殺人で逮捕。

17(金)●米国・GM社、高級車キャディラックに電気式セルフスタータ世界初採用。

18(土)●三条実美の没後二〇年祭を東京小石川・護国寺境内で挙行。

19(日)●都築式飛行機、代々木で滑走試験。

20(月)●エジプト首相、民族主義者に暗殺される。

21(火)●日米新通商航海条約、調印(日本は米輸入品への関税自主権を初めて確立)。
●夏目漱石、文学博士号を辞退。

22(水)●カナダ議会、今後も大英帝国の一員にとどまることを決議。

23(木)●朝鮮総督府、朝鮮人参耕作奨励規則を発布。

24(金)●佐世保海軍工廠、第三ドック完成。

25(土)●マレーなどのゴム園経営の南洋護謨、設立。

26(日)●茨城・水戸直行の観梅列車第一号が上野出発。

27(月)●文部省、北朝論主張の編修官・喜田貞吉を休職。

28(火)●東京・千住近くの隅田川で、石炭一〇〇トン積載の船が激流と過積載から沈没。乗員は無事。

▲東京・丸ノ内に、帝国劇場開場(3月1日)渋沢栄一らが出資した、横河民輔設計の日本初の洋式劇場だった。開場式では6代目尾上梅幸らが「式三番叟」を演じ、祝った。

「グラヒック」

「警視庁百年の歩み」

▲徳冨蘆花、一高で「謀叛論」講演(2月1日)政府の思想弾圧、前年に起こった「大逆事件」での幸徳秋水らの検挙・処刑を批判、校長・新渡戸稲造の譴責問題に発展した。写真は「謀叛論」の草稿。

◀警視庁、新庁舎竣工(3月30日)東京・日比谷堀端に面積2450平方メートル、赤煉瓦の3階建て建築がお目見え。ほぼ同時完成の帝国劇場の白煉瓦と対照的な壮観さだったが、大震災で崩壊。

▼戦艦「安芸」完成(3月11日)過去最大の常備状態排水量1万9800トン。30センチ砲連装2基などを装備。写真は引き渡し後、運転試験のため呉を出港した「安芸」。12月に第1艦隊に編入された。

▲行李詰め殺人犯、大阪で逮捕(3月8日)前月、長野・善光寺で発見された行李詰めの死体は、犯人の妻。写真は、新橋駅から警視庁に連行される男と愛人。

▶内村鑑三、満50歳のお祝い(3月23日)儀礼と牧師制度を無用とする、無教会主義を唱える内村の教友たちが音頭。前列中央・内村、2列目右から3人目・鶴見祐輔、一人おいて森戸辰男。

呉市企画部海事博物館推進室提供

明治44年3月

1(水)●大阪毎日新聞社が東京日日新聞社を合併、「毎日電報」との合同で新「東京日日」発行開始。

2(木)●東京・品川の料亭で魚店店員三人が政友会代議士といつわって無銭飲食、品川署に勾留。

3(金)●山口県宇部の炭坑に海水浸水、七五人溺死。

4(土)●京都電鉄社長、六〇万円脱税で拘引。

5(日)●逓信省内に逓信博物館開設(7日から公開)。

6(月)●朝鮮総督府、電気事業取締り規則を施行。

7(火)●京都・知恩院の宗祖七百年大遠忌、終了。

8(水)●株成金の岩本栄之助、大阪・中之島公会堂設立のため一〇〇万円を寄贈。

9(木)●寺内正毅朝鮮総督暗殺計画が発覚。

10(金)●白瀬南極探検隊、南緯七五度で引き返す。

11(土)●衆議院、普選法案を初めて可決(貴族院否決)。

12(日)●米飛行家・マース、大阪・城東練兵場で公開飛行を行う(4月1日、目黒競馬場でも)。

13(月)●神奈川県小田原で水道敷設反対の町民大会。

14(火)●日本船主同盟会、海事銀行設立請願書を提出。

15(水)●東京の浅草寺本堂など、特別保護建造物に。

16(木)●衆議院、朝鮮銀行法案を修正議決(29日公布、韓国銀行を朝鮮銀行に改称)。

17(金)●清国で阿片禁止法発効。

18(土)●埼玉県下農民八千余人、堤防工事費の負担問題などへの不満から大挙して県庁に陳情。

19(日)●東京・麻布で、古物商ら数人から一八〇〇円をだまし取った賭博詐欺団を現行犯逮捕。

20(月)●立憲国民党、新通商条約改正などを不当とする決議案を衆議院に提出(21日、否決)。

21(火)●樺太庁、樺太の地名を当て字により変更。バラツトナイを原戸岬、トウブツを遠淵など。

22(水)●大分線(現・日豊本線)、中山香—日出間開通。

23(木)●米国・カリフォルニア州上院、日本人の土地所有禁止法案を可決。

24(金)●横浜正金銀行、清国政府の五分利つき鉄道公債一〇〇〇万円の国内での募集を引き受け。

25(土)●神奈川子安の住民、横浜市編入に反対の陳情。

26(日)●東京・小石川の東京女学校卒業式で、法学博士・高田早苗が講話。

27(月)●ローマ万国美術博開幕。日本画など出品。

28(火)●東京・築地に東京市施療院が開院。

29(水)●日本初の労働立法、工場法公布。一二歳未満の就業などを禁止(大正5年9月1日施行)。

30(木)●電気事業法公布(10月1日施行)。

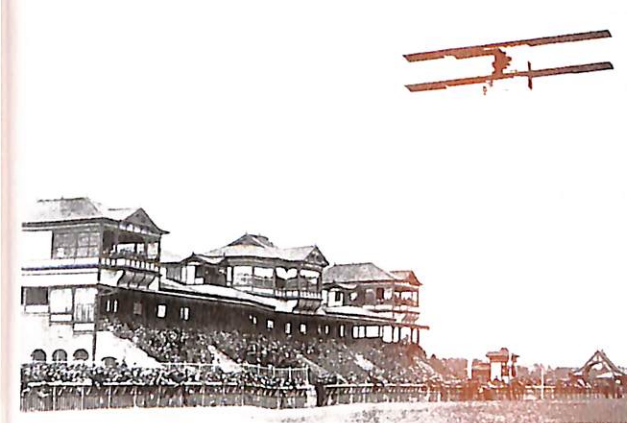
31(金)●九州・三池炭坑の三井工業学校、第一回卒業式。

▶新日本橋、渡り初め（4月3日）妻木頼黄の設計により、橋梁に花崗岩を使用し麒麟と獅子のブロンズ装飾をほどこした、ルネサンス式のアーチ橋に変身。2000人の来賓が出席した雨中の開通式は、野次馬で大混雑、負傷者数十人を出した。

「グラヒック」

「イリュストラシオン」

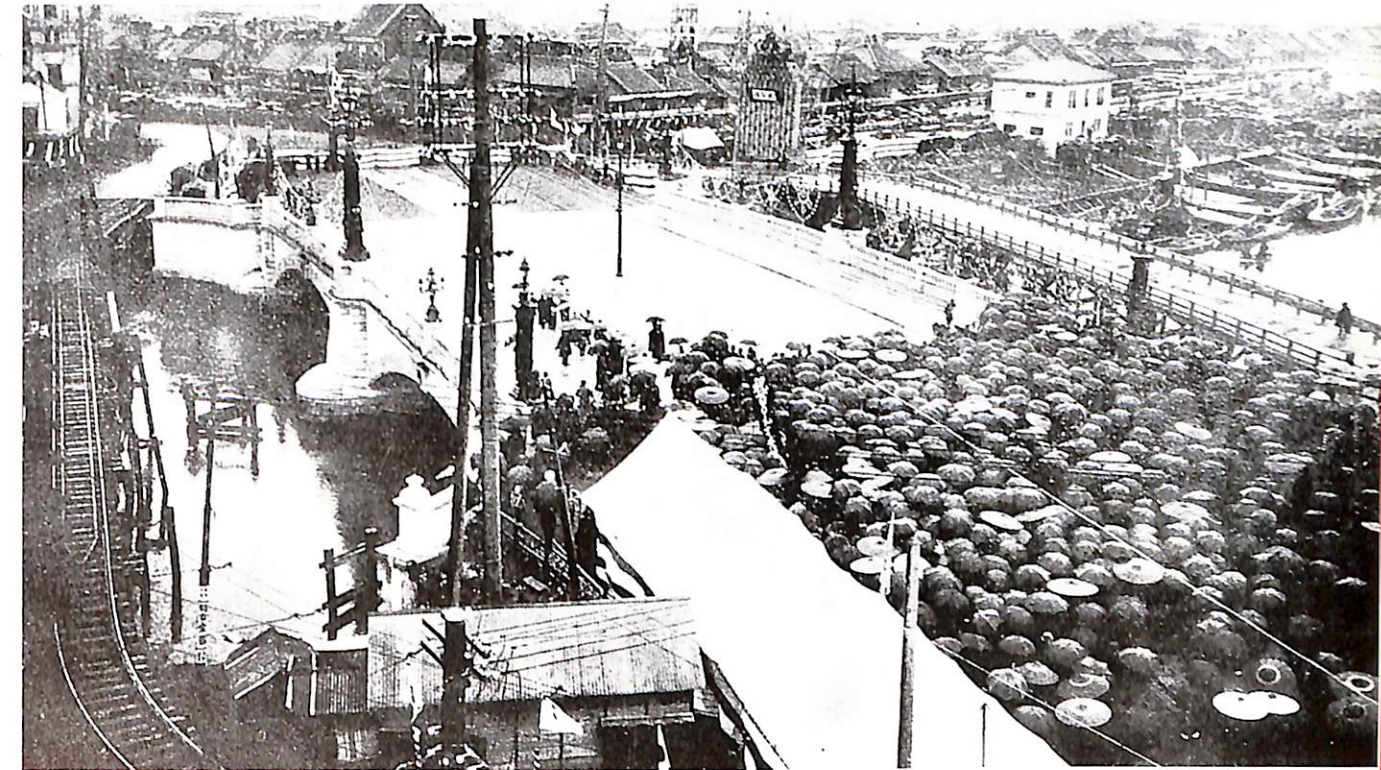
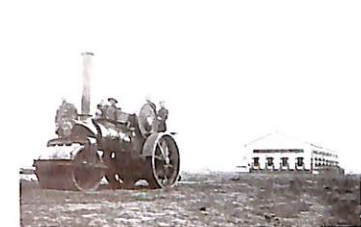
▲シャンパン騒動勃発（4月12日）仏北東部シャンパーニュ地方のブドウ栽培農家がアイ地方などの「シャンパン」醸造業者に抗議、暴動に発展した。シャンパンは、固有名と議会が決めていた。

▼東京・目黒競馬場で公開飛行（4月1日）飛行家・マースらの米・ボールドウィン飛行団のカーチス式機が高度20～30メートルで馬場1周、喝采をあびた。

▶吉原炎上（4月9日）午前11時、遊廓の貸座敷から出火、強い南風にあおられてたちまち燃え広がり、4時間余の間に廓外を含め約6500戸を焼失した。

「グラヒック」

「イリュストラシオン」

「写真タイムス」

◀所沢に初の飛行場完成（4月4日）陸軍気球研究会が、埼玉県に23万坪の土地を購入。この日、さっそく日野大尉が17キロを飛び、新記録樹立。写真右は格納庫。

▼乃木陸軍大将、上海で植樹（4月20日）東伏見宮に随行し、英国へ向かう途上、日本人小学校訪問を記念し、校庭にカエデを植えた。写真中央が乃木希典（61）。

「太陽」

明治44年4月

1（土）●警視庁、捜査に指紋法を採用。
●市町村立小学校教育費への国庫補助が倍増。
2（日）●モロッコのベルベル族、フェズを襲撃。フランス軍、モロッコへ出兵。
3（月）●東京・日本橋が石造塔橋に改造され開通式。
4（火）●所沢飛行場が開場。
5（水）●長崎本線長与駅付近で長崎行き下り列車脱線、三八人重軽傷。
6（木）●慶応と三高のラグビー部が東京・三田で対戦。初の日本人同士の試合。三対三で引き分け。
7（金）●広告物取締法公布。駅構内広告が有料化。
8（土）●鷲尾順敬ら仏教史学会設立（「仏教史学」創刊）。
9（日）●東京・吉原遊廓で出火、遊廓は全焼し八人死亡。周辺六五〇〇戸以上焼失する大火となる。
10（月）●全国の菓子飴製造業者による品評会が東京・溜池で開催（出品菓子約四二〇〇点）。
11（火）●農商務省、牛疫血清製造所を設置。
12（水）●東伏見宮、英国王戴冠式参列のため東京を出発。乃木陸軍大将、東郷海軍大将が随行。
13（木）●鉄道院、東京市内で高架鉄道敷地の測量開始。
14（金）●茨城・水戸中学で、成績発表日の夜に校舎などを破壊した卒業生らに卒業取り消し処分。
15（土）●東京三田・慶応義塾の図書館が竣工。
16（日）●警視庁、東京・日比谷の新庁舎に移転。
17（月）●朝鮮総督府、土地収用法制定。
18（火）●近衛師団、軍刀術の修練などを目的とした剣術競技会を初めて開催。以後毎年一回開催。
19（水）●山口県由宇沖で汽船「第二大島丸」が強風のために沈没、九人が死傷。
20（木）●ポルトガル制憲議会、政教分離を決議。
21（金）●栃木県渡良瀬川沿岸の鉱毒被害地住民四〇人、北海道・佐呂間別原野に入植。
22（土）●東京・京橋の明治屋が株式会社に改組。
23（日）●東京・日本橋小伝馬町の加藤清正銅像が、府下・池上本門寺に移転。
24（月）●鳥取県八頭郡の民家から出火、一六〇戸焼失。
25（火）●華麗な演出で知られる奇術師、松旭斎天勝が天勝一座を組織、浅草・帝国館に出演。
26（水）●仏軍、外国人居住者保護を口実にフェス占領。
27（木）●中国革命同盟会、広州で蜂起するが、清軍に鎮圧され死者八六人（黄花崗事件）。
28（金）●栃木県宇都宮で白瀬南極探検隊の活動写真会。
29（土）●京都・新京極の京都座新築、開業式挙行。
30（日）●宇都宮一帯の豪雨で大相撲興行が中止。

証言・あの日この日

神近市子（22）

1月24日（火）〈そこに号外だった！　大逆事件の十二名の死刑が行われたのであった。私は〈死刑〉ということに興奮して、すぐそれを二階に見せに持って行った。夢二氏はそれを手にとると、フーン！と言って沈黙された／まもなく夢二氏が階下に下りて来られた。大変興奮していて、私にはじめて十二人の中には（幸徳）秋水をはじめ数人旧知の人がいることを話された〉（神近市子『私が知っている夢二』）

竹久夢二も、社会主義青年だった関係で、一斉検挙で逮捕されたが、わずか2日間の勾留で釈放された。しかし受けたショックは大きかった。この頃、神近市子はまだ学生だったが、環夫人の遠縁にあたることから夢二宅に頻繁に出入りしていた。そしてこの日、夢二と「大逆事件」の関係を知る。この夜は、夢二の提案で線香と蠟燭を買い、皆でお通夜をすることになった。（山崎行太郎）

「グラヒック」

▲国産機、初飛行（5月5日）奈良原三次が完成した「奈良原式第2号」が所沢飛行場でテスト。高度約5メートル、距離約60メートルの飛行に成功した。全幅10メートル、50馬力だった。

「グラヒック」

▼中央本線全通（5月1日）宮ノ越ー木曾福島間がつながり、東京ー名古屋間413キロが開通。トンネル95ヵ所などの建設を含む難工事だった。写真は名古屋・鶴舞公園での祝典。

▶カバ騒ぎ（5月）東京・上野動物園に、独・ハンブルクのハーゲンベック動物園から購入した2歳のカバがやって来た。日本初登場とあって、檻の前は大行列。水槽の水を減らし全身を見せた。

「グラヒック」

CORBIS-BETTMAN／PPS

▲ラグビー、日本チーム同士初試合（4月8日）京都・三高の挑戦およばず、36対零で慶応が圧勝。写真は両校部員。3列目右から4人目が三高ラグビー部創始者・堀江卯吉。6日には慶応2軍と引き分け。

◀アメリカで第1回「インディ500」（5月30日）コースが整備され、インディアナポリス自動車レースで初の500マイルレース。2万5000ドルの史上最高賞金をめざし、世界中からトップレーサーが参加したが、ハーロウン（写真）が優勝。

明治44年5月

1（月）●中央本線、全通式。
2（火）●奈良の東大寺大仏殿、修繕完了し上棟式。
3（水）●商法改正法、公布（企業に関する法律としての性格が強められ二〇〇条の大改正）。
4（木）●大阪砲兵工廠、初の軍用自動車試運転。
5（金）●奈良原三次、所沢飛行場で国産機の初飛行。
6（土）●大相撲、太刀山に横綱免許授与。
7（日）●『大阪市史』（全七冊）刊行開始。
8（月）●文部省、『尋常小学唱歌』第一巻刊行。
9（火）●清国、主要幹線鉄道の国有化公布（各地で反対運動が起こり、辛亥革命の契機となる）。
●公営初の千葉県営鉄道（柏ー野田町間）開業。
10（水）●文部省、維新史料編纂会（総裁・井上馨）設置。
11（木）●蚕種類の改良統一のため原蚕種製造所設置。
12（金）●桂太郎首相、官邸に記者団を招き午餐会。
13（土）●芝浦製作所、煙突・水管などをのぞく機械類の製作を石川島造船所に移管。
14（日）●多趣味で知られる逓信相・後藤新平が、みずから構想の芝居を帝劇で上演予定、と新聞に。
15（月）●米国最高裁、スタンダード石油などに独禁法違反で分割命令。
16（火）●北海道・小樽で大火、一二五〇戸焼失。
17（水）●文部省、通俗教育調査委員会設置。
18（木）●台湾で栃木県製の箒が大好評、と新聞に。
19（金）●日本・スウェーデン通商航海条約調印。
20（土）●文芸協会第一回公演で「ハムレット」上演。
21（日）●仏のパリで競技中の飛行機が墜落、観覧していた陸軍大臣が死亡、モニー仏首相も重傷。
22（月）●森鷗外らの文芸委員会委員、第一回顔合わせ。
23（火）●外務大臣・小村寿太郎、米アジア艦隊司令長官を官邸に招いて晩餐会を開く。
24（水）●朝鮮の実業家らの日本産業視察団が来日。
25（木）●メキシコのディアス大統領が辞任。翌日、仏に亡命し独裁体制終わる（メキシコ革命）。
26（金）●独、アルザス・ロレーヌ地方を一州と公認。
27（土）●煙草専売局第一製造所、東京・淀橋に落成。
28（日）●皇太子、目黒競馬場でレースを観戦。
29（月）●普通選挙同盟会、政府の圧力のもとで自発的解散を決定（翌日解散）。
30（火）●米国・インディアナポリス自動車レースで初の五〇〇マイルレース開催（優勝はハーロウン）。
●恩賜財団・済生会、設立。
31（水）●門司に停泊中の関釜連絡船（下関ー朝鮮の釜山間）二隻が衝突。

▶帝国学士院第1回恩賜賞、木村栄が受賞(6月12日)学術研究奨励のため、前年、明治天皇の下賜金をもとに設置。木村は緯度変化のZ項発見者。7月5日授与式。

▼「大阪毎日新聞」1万号達成(6月22日)明治21年発足、発展著しくこの年の2月には「東京日日新聞」を買収、姉妹紙に。写真は100ページにおよぶ記念号の配達。

毎日新聞社

ユニフォト・プレス

◀▲英国王・ジョージ5世戴冠式(6月22日)ウェストミンスター大聖堂の式後、バッキンガム宮殿へパレード。沿道は大群衆の歓呼の声で満ちた。写真左は、東伏見宮とともに式典に参加した乃木・東郷両大将。

「イリュストラシオン」

▲徳川大尉、日本初の飛行機事故(6月9日)ファルマン式で所沢―川越間の初の往復飛行成功後、ブレリオ単葉機で川越に向かったが、麦畑に墜落、打撲傷。

毎日新聞社

◀八戸に電灯ともる(6月26日)八戸水力発電所から八戸町と近郊1361戸に送電。北の港町が突如、明るくなった。青森県内で3番目。写真は鮫地区での祝賀会。

明治44年6月

1(木)●平塚らいてうら、青鞜社発起人会開催。
2(金)●文部省、第一回通俗教育調査委員会を開会。
3(土)●茨城県真壁郡内で毛虫が大量発生、と新聞に。
4(日)●日本海洋会主催の海洋展覧会、東京・虎ノ門で初開催。約一万点の海洋資料が出品される。
5(月)●北原白秋の詩集「思ひ出」刊行。
6(火)●米・ニカラグア借款協定(関税権が担保)。
7(水)●東北地方に激しいヒョウ。青森県下では約九〇センチ積もり、家屋浸水などの被害。
8(木)●三菱製紙所、竹からのパルプ製造に成功。
9(金)●徳川大尉がファルマン式複葉飛行機で初の所沢―川越間往復成功。
10(土)●東京音楽学校、義太夫の竹本摂津大掾を邦楽調査係名誉嘱託に任命。
11(日)●東京美術学校で聖徳太子祭。仏像など展示。
12(月)●愛媛県松山沖で汽船同士衝突、乗員は無事。
13(火)●パリでストラヴィンスキー「ペトルーシュカ」上演、主役に露の天才舞踏家・ニジンスキー。
14(水)●内務省、無政府主義者・社会主義者などを取り締まるための「特別要視察人視察内規」を制定。
15(木)●奄美大島付近海中を震源とする地震発生、鹿児島では家屋倒壊などで五人死亡。
16(金)●子爵・立花種忠、天皇に模型飛行機を献上。
17(土)●長野・岐阜県境の焼岳、一五日の大噴火による新たな二ヵ所の噴火口を観測。
18(日)●日本列島に大型台風。東京・銀座は全商店が閉鎖。
19(月)●大阪電気軌道、本線建設工事を開始。
20(火)●日本郵船神戸支店、船舶への無線通話試験。
21(水)●英・豪華客船「オリンピック号」、処女航海終了。
22(木)●ロンドンで英国王・ジョージ五世戴冠式。
●大阪毎日新聞、一万号記念に一〇〇ページ新聞を発行(うち八〇ページが広告)。
23(金)●日露、会社互認協約に調印(30日公布)。
24(土)●日独新通商航海条約、ベルリンで調印。
25(日)●衛生知識普及めざす大日本私立衛生会の会堂が東京・麹町に完成し落成式。
26(月)●日露両国、清国への満州開発借款に関し、一部修正希望を仏・英に申し入れ。
27(火)●警視庁が戸外での飼犬口輪を廃止、と新聞に。
28(水)●神戸製鋼所、鈴木商店から分離独立。
29(木)●音楽教育・吃音教育の功労者、伊沢修二の還暦祝賀会が東京音楽学校で開催。
30(金)●日本・デンマーク、通商暫定取り決め締結。

「現場」を歩く 中之島

"相場師"岩本栄之助が命をかけた中央公会堂のリニューアル

山本徹美

▲ネオ・ルネサンス様式、赤煉瓦造りの威容は、明治大正期の代表的洋風建築。 但馬一憲

大阪市 大阪駅 北区 大阪市役所 大阪市中央公会堂 中之島 淀屋橋 天神橋 西区 御堂筋 中央区

明治四四年四月二〇日、大阪市に一〇〇万円(現在の約五〇億円)もの寄付がなされた。株式仲買商「岩本商店」を経営する岩本栄之助(三四)が、市民のために大規模集会所を建設してほしいとの意向を添えて申し出たものである。

岩本は明治四二年秋、渡米実業視察団(渋沢栄一団長)に参加、米国の富豪が公共事業や慈善事業に私財を投じている実状を目撃して「大に感動」(自筆「寄附事件記録」)、みずからもそれにならおうと、渋沢に相談しての行動だった。

大正元年一一月、大阪市は当時の第一級建築家一五人を指名して公会堂の設計コンペを行った結果、岡田信一郎早稲田大学教授の案を採用。それをもとに辰野・片岡建築事務所が設計、施工にあたる。同事務所は、東京駅の設計で知られる辰野金吾と、日銀大阪支店の工事を手がけた片岡安が共同経営していたものだ。翌年春に着工、工期は五年間が予定された。

岩本は日露戦争後の「熱狂相場」で成功、巨万の富を得たが、第一次大戦後の「暴騰相場」では講和を見こんで「売り」に出たのが災いし、いっきょに破綻。大正五年一〇月二二日、自宅で自殺をはかる。陸軍中尉として従軍した際に所持していた拳銃で喉を撃ち抜いたのだ。同二七日、岩本は回生病院で永眠。病室からは中之島に建設中の中央公会堂が一望できた。

命懸けの寄進

平成一〇年四月、大阪市中央公会堂を訪ねてみた。赤煉瓦の建物は東京駅に似ている。地上三階、地下一階、延べ床面積七九〇四平方メートル。一階と二階が大集会室で定員一八〇〇人。三階には中集会室(同五〇〇人)と小集会室(同一五〇人)などがある。大正七年一一月一七日に完成して以来、部分的な補修はあるものの、八〇年間ほぼ原型を保ち続けている。

「年間七〇万～八〇万人が利用され、用途は講演、会議、舞踏会、ファッションショーなど多種多様です」(豊田幸一館長)

▲大正7年11月17日の中央公会堂落成報告祭。

同館には昭和三二年から岩本の長女・善子さんが勤務していたが、平成九年四月、急逝。享年八二歳。豊田館長が偲ぶ。

「葬儀には磯村隆文市長が参列され、ご遺族も感激されていました。市の岩本栄之助さんへの敬意を再認識しました」

大阪市中央公会堂蔵

◀大正5年10月、岩本栄之助が自殺をはかる直前に、三越で写した形見の写真。

平成九年一〇月、市は中央公会堂の保存再生事業を決定。外観、内部は現状を保ったまま、基礎部分に免震工事をほどこす。工事は平成一〇年度から。そのため一〇月二五日から三年間、休館する

「リニューアルした館には岩本栄之助コーナーを設けます」(豊田館長)

窮地におちいった時、岩本商店の番頭が、大阪市への寄付金を借用したら、と進言した。岩本は静かに首を横に振ったという。相場の本質と金銭の価値を知悉した岩本の選択。その遺産は二一世紀以降も受け継がれる。

ベストセラー
『すみだ川』と詩集『思ひ出』荷風、白秋それぞれの〝懐旧〟

前年、二四歳の若さで雑誌「白樺」を創刊した武者小路実篤が、小説『お目出たき人』をこの年二月に上梓した。近くに住む女性にひかれた青年の失恋譚だが「自分はまだ、所詮女を知らない。／夢の中で女の裸を見ることがある。しかしその女は純粋の女ではなく中性である。……自分は女に飢えてゐる／自分はこの飢を鶴（恋している女性）が十二分に癒してくれることを信じて疑はない」など、その恋の悩みと愚かしい行動を率直に描いていた。

また、永井荷風の短編集『すみだ川』が三月に刊行され、その江戸趣味が評判を呼んだ。表題作は味わい深い青春小説で、幼なじみのお糸が芸者になるのを悲しむ長吉が主人公。自分も芸人になろうと決意するが、母親はもちろん、伯父にも反対され絶望、重い病気にかかる。ここで、長吉の本当の思いを知った伯父が、長吉を役者にしてお糸と添わせてやろうと心に決める……といった話である。

荷風自身は、この著書の第五版の序文で次のように記している。「わが生れたる東京の市街は既に詩をよろこぶ遊民の散歩場ではなくて行く処としてこれ戦乱後新興の時代の修羅場たらざるはない。其の中にも猶わづかにわが曲がりし杖を留め、疲れたる歩みを休めさせた処は矢張いにしへの唄に残つた隅田川の両岸であつた……せめてはわが小さきこの著作をして、傷ましき時代が産みたる薄幸の詩人がいにしへの名所を弔ふ最後の中の最後の声たらしめよ」と。

詩歌の方では、北原白秋の抒情小曲集『思ひ出』がこの年六月に刊行された。文庫本ほどの小ぶりの本で、装丁も挿絵もすべて白秋自身が手がけた。その自序に「充実した現在生活の根底を更に力強く印象せしめんが為に、兎に角過去といふわが第一の烙印を自分で力ある額の上に烙きつけようと欲したのである」と記し、この詩集の性格を明確にした。

日本近代文学館提供（4点とも）

▲『お目出たき人』（洛陽堂、60銭）

▶『すみだ川』（籾山書店、一円）

▲『思ひ出』（東雲堂書店、90銭）

▶『思ひ出』中の白秋のイラスト。

スターと名場面
警視庁が上映禁止の騒動に怪盗「ジゴマ」超ヒット！

この年三月に開場したばかりの帝国劇場のステージから、一人のスターが誕生しようとしていた。五月の文芸協会第一回公演「ハムレット」でオフィーリアを演じた松井須磨子である。この演技がきっかけで劇作家にして演出家・島村抱月から強い関心が寄せられ、一一月にはイプセンの「人形の家」でノラを演じるなど、須磨子は新しい時代の女優として急速に大きく成長していくのである。

映画の方では、この年一一月に浅草・金竜館で封切られたフランス映画「ジゴマ」（ヴィクトラン・ジャッセ監督）が大ヒットし、ジゴマブームは年が替わっても衰えることがなかった。変装術に長けた神出鬼没の怪盗ジゴマを名探偵・ポーリンが追う物語だが、列車で逃げるジゴマを追ったシーンでは「進行する列車の上、ふたたび両者は一上一下、しばしば激しい大格闘……飛んで火に入る夏の虫、してやったりと悪漢ジゴマ、倒れしポーリン探偵しり目にカンラカンラとうち笑う」と弁士はリズミカルに語った。

子どもたちの間でも〝ジゴマごっこ〟が大流行したが、これに目くじらを立てたメディアがあって、放置するのはけしからんと警視庁をあおり、大正元年一〇月には上映禁止にまで追いこんだ。それほど、世を風靡した映画だったのである。

毎日新聞社

▲文芸協会が、開場したばかりの帝劇で公演した、坪内逍遥訳の「ハムレット」の舞台。

▶「ジゴマ」で怪盗ジゴマを演じた、アルキイェール。

マツダ映画社提供

吉田智恵男提供

◀「ジゴマ」のノベライゼーションも多く出た。これは〝桑野本〟と呼ばれている本の表紙で、主役のアルキイェールが表紙を飾っている。

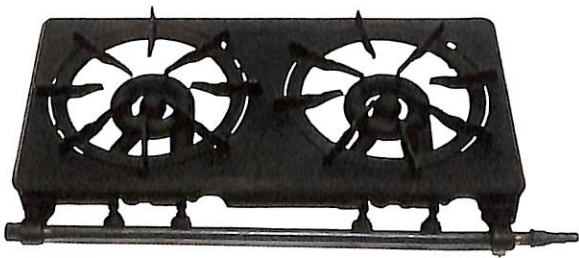
モノ語り'11
「女性用セーフティ自転車」、ブランド名も新感覚の「クラブ水白粉」。〝新しい女〟の時代が今、そこに！

自転車文化センター蔵／橋田守

◀ **女性用自転車が登場した意義深さ**　自転車が郵便局や陸軍など、もっぱら公的業務用の高価なものであった時代に、「女性用セーフティ自転車」が発売され注目された。チェーンを使わないシャフトドライブ方式で、タイヤは空気を入れるタイプ、後輪の泥よけには裾を巻きこまないようにドレスガードが張られていた。価格は不明だが、こぢんまりした一軒家と同じ程度の価格だったという。女性が社会参加できる時代の到来を、予感させる乗りものだった。

▼**国産蓄音機の第1号**　国産としては初めてのホーン内蔵タイプ（表にラッパが出ていない）の蓄音機が、日本蓄音機商会（現・日本コロムビア）から、1台30円で発売された。ポータブルタイプの手軽さと、先進的なメディアとしては手頃な価格が需要を掘り起こし、以降、大正年間を通じ、広く好評を博した。

▼**新しい化粧品が女性の憧れに**　中山太陽堂（現・クラブコスメチックス）は、この年「クラブ水白粉」を発売し、その洒落た感覚が〝新しい時代〟の女性たちを大いに刺激した。当時中山太陽堂は、イギリスの薬学士で化粧品製作技術者のP・L・スミスと契約し、技術研究面の主任に迎えており、その成果が具体的な化粧品として市場に出たのである。

▲**洒落た容器に入った練り歯磨き**　国産初の「チューブ入り歯磨き」が、小林商店（現・ライオン）から発売された。欧米の製品動向や評判の高い輸入歯磨きを研究し、積極果敢に輸出用に開発したもの。しかし、チューブ製造は国内ではできなかったため、輸入にたよらざるをえなかった。国内販売価格は、1個20銭だった。　平山亮

日本カメラ博物館蔵／大畑俊男

▲**愛好者クラブまでできた人気カメラ**　蛇腹方式の小型簡易カメラ「ミニマムアイデア」が、小西本店（現・コニカ）から発売され、人気を呼んだ。感光材料はガラス製の乾板で、1枚写すごとに交換しなければならなかったが、シャッタースピードがI（インスタント）とB（バルブ）のみ、絞りも2段階だけという使いやすさが受けた。本体は木製で、外側は黒の革張り。愛好者のクラブまでできたほど、よく売れた。価格は、ラシャ製サック入りで9円50銭だった。

▶**ガスで調理する時代を予感させた**　コックをひねってマッチで火をつけるタイプの「英国製二重二口七輪」が、東京瓦斯から発売された。薪や炭での調理が普通だった時代だから、その簡便性には目をみはらせるものがあった。ただし価格は、調理用品としては破格の16円だった。

ガス資料館蔵

「クラブ」から西洋文化の香りがした

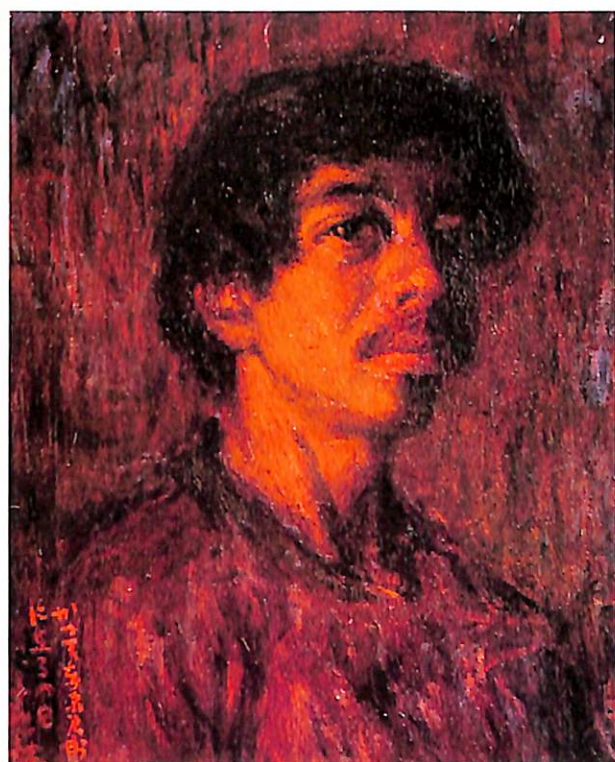
もともとは神戸の化粧品販売店だった中山太陽堂は、全国に販売網を広げるとともに自社製品の開発に取り組み、明治39年、ついに〝洗い粉〟の販売にこぎつけた。この時、商品名に「クラブ」というブランド名をつけ、これを商標として登録した。クラブ化粧品の誕生である。当時「クラブ」という言葉には、西洋風のコミュニケーションの場という響きがあり、新しい時代の到来を感じさせた。写真の瓶に見られる「帝国化粧品倶楽部」というのは、中山太陽堂の製造元としての名称で、ここでも「クラブ」を用いた。パッケージも斬新で、クラブ化粧品は多くの女性の心をとらえたのである。

◀「美顔術用クラブ洗面香水」のお洒落な容器。

人物クローズアップ

青木繁（二八）

名作「海の幸」の天才画家を悶死させた貧苦と画壇の壁

◀明治37年、美校の卒業制作として描かれた「自画像」。60.5×45.3センチ。前年には白馬会賞を受けて画壇の注目をあび、青木の前途はまさに洋々として見えた。東京芸術大学提供

青木繁は明治四四年三月二五日、結核のため二八歳の短い一生を終えた。この日の約四ヵ月前、彼は四三年一一月二二日付で、遺書とも言うべき手紙を姉と妹にあてて書いた。もう二度と病院を出ることはないとの予感を抱きながら、青木が涙ながらに書いたもので、そこには母への不孝と兄弟姉妹への不悌に対する詫び、みずからの不幸と不運への嘆きと憤り、死後の亡骸の処理などのことが、切切と綴られている。

それは天才画家と言われた青木の、貧困と自棄、絶望と孤独の生涯への、出口のない叫びだった。

青木繁は、明治一五年七月一三日、福岡県久留米市に生まれた。家は貧しかった。父の廉吾に生活力がなく、母・まさよとのいさかいが絶えなかった。青木の不幸は、五人兄弟の長男として、この貧しい一家を背負って立つ役目を負わされたことである。また、母方の伯父・吉田謙太郎が青木の中に絵の素質をみいだし、図画の手ほどきをしたのが青木の運命を決定づけた。しかし、絵で一家を養うには、まだ困難な時代だった。

明治三二年、上京した青木は絵画塾の不同舎に入門、翌三三年には東京美術学校（現・東京芸術大学美術学部）西洋画科選科に入学した。青木の名が知られるようになるのは、当時画壇の中心にあった黒田清輝の主宰する白馬会の展覧会で、白馬会賞を得た時からである。「黄泉比良坂」「優婆尼沙土」「大穴牟知命」など、神話に題材を取った作品が、その豪放なタッチとあいまって強烈な印象を与えた。

さらに、三七年の夏、房総の布良に旅した際に描き上げた「海の幸」が評判を押し上げた。この絵を見た時の感動を、詩人の蒲原有明は「明星」（明治三七年一一月号）に、同名の詩「海の幸」として発表している。

しかし、青木の運命はこの頃から一気に暗転する。布良に同行した福田たねとの間に幸彦（後の尺八演奏・作曲家、福田蘭童）が生まれ、未婚のままではあったが、わずかな団欒を得たのもつかの間、父の病気で久留米の家族の生活が、すべて青木の肩にかかることになった。さらに四〇年、東京府勧業博覧会に出品した「わだつみのいろこの宮」が、絵画の正統性に比重をかけつつあった白馬会の審査員に認められず、三等最末席。物心両面にわたって青木を打ちのめした。

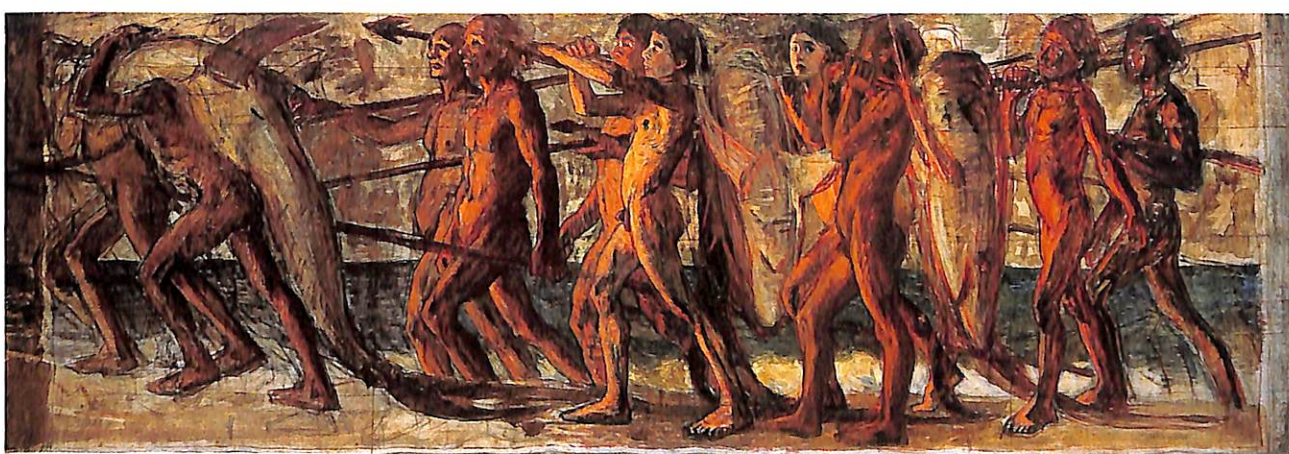
青木の生活は酒色に溺れてすさみ、結核がそれに追い打ちをかけた。

詩人の松永伍一氏は、青木繁を次のように語る。

「青木は詩人としての資質が強い人で、彼の絵はそうした詩人的体質の現れでした。その資質は構成の狂いやデッサン力の弱さを補ってあまりあるものだったのですが、画壇ではそれを、徐々に認めなくなっていったのです」

青木の遺書に、「此世の怨恨と憤懣と呪咀」という言葉がある。これは自分を認めない画壇に向けられたものだった。

死の床には弟妹だけがたった二人。血を吐き、恨みをのんで死んだ青木が、再び評価されるようになるのは、昭和に入ってからのことだった。

▶青木の恋人、福田たね。自身も画学生だった。平凡社提供

▲青木の声価を決定づけた名作「海の幸」。明治37年。70.2×182センチ。中央の明るい顔のモデルは、福田たね。石橋美術館提供

▲明治38年8月、茨城県川島で、生まれたばかりの愛児・幸彦を抱く青木。幸彦の名は、「海の幸」からとられたもの。しかし、幸福な生活は長くは続かなかった。石橋光子提供

決定的瞬間

極地探検史上最大のレース “悲劇のスコット隊”を制し アムンゼン、南極点到達!

三台の犬ゾリで前進していたノルウェーの探検家、ロアルド・アムンゼン（三九）は、茫漠と広がる雪原の中にソリを止めた。まわりを見渡しても人の痕跡は何も見えない。一九一一年一二月一四日午後三時、南緯九〇度の南極点に立った瞬間である。アムンゼンはこの時のことを「決勝点に着いた。旅は終わった」と語っている。しかし、ここまできて、計測ミスで南極点を踏みはずしていたということがあってはならない。彼は三日間極点に滞在し、徹底的な天測と極点包囲（東西南北に隊員を片道二〇キロずつ歩かせた）をして万全を期した。そして極点に設営したテントに国旗を掲げ、ノルウェー国王宛の報告書（自分が帰路に遭難した場合に備え）と、後から来るであろう英国隊のR・F・スコット（四三）にあてた手紙を書いた。

南極は「未知の南の大陸」として、長い間、人間を寄せつけなかったが、一八四一年、イギリスのジェームス・ロスが大陸の中に活火山（エレバス山）があることを発見し、一九〇一年にスコット（英国）、一九〇九年にはE・H・シャクルトン（英国）が探検を行っている。しかし、いまだに南極点には誰も到達していなかった。

一九一一年一月四日、スコットを乗せた三本マストの「テラ・ノバ号」が南極大陸のマクマード湾に到着。一〇日後には、アムンゼンを乗せた「フラム号」もロス海の鯨湾に接岸した。スコットは南極大陸は二度目であり、今回はイギリス海軍の名誉にかけても南極点に立たなければならなかった。一方、アムンゼンは北極点踏破を生涯の目標としていたが、一九〇九年四月にアメリカ人のR・E・ピアリーに先を越され、急遽その行き先を南極に切り替えた。そのため一九一一年の両隊は、「どちらが先に南極点に立つか」という、極地探検史上最大のレースを展開することになったのだ。

同年一〇月二〇日にアムンゼン隊が出発、一一月一日にはスコット隊が南極点をめざして出発した。片道約一五〇〇キロ、往復三〇〇〇キロ。この旅は途中までデポ（食料貯蔵庫）を設営しているとはいえ、往路、復路の大半を食料を持って走破しなければならない。アムンゼン隊（五人）は、五二匹のエスキモー犬に四台のソリを引かせて、大氷床を走った。行く手には、世界第二位という大氷河が待ち受けている。犬は零下三〇度の吹雪の中でも眠り、クレバスに落ちても紐で引き上げることができ、隊員たちの期待に十分こたえていた。しかしアムンゼンは、その犬も全体の食料計画の中に組みこみ、計画的に殺して食料とした。翌年一月二五日、「フラム号」に帰還した時、犬は一一匹に減っていた。

一方、スコット隊は一六人（自動ソリ二台、馬一〇頭、犬二三匹）で出発した。ところが、往路の約半分の地点で自動ソリは故障、馬は寒さに弱く射殺、犬は餌がなく基地に帰すという、予想外の事態に見舞われた。それ以降、人力でソリを引く。しかも、苦難のはてに到達した南極点でスコットたち五人のアタック隊員が見たものは、ノルウェーの国旗だった。

スコット隊の悲劇は、さらに続く。帰路に隊員を二人失い、三月一九日、一トンデポの二〇キロ手前という地点で吹雪に閉じこめられ、一〇日後に飢えと寒さのため全員が死亡した。スコットは死の直前、妻にあてた手紙を書いているが「わが妻へ」と書き出してそれを消し、「わが未亡人へ」と書き改めていた。

▲1911年12月14日、南極点に初めて到達し、ノルウェー国旗を掲げるアムンゼン(1872〜1928)。1926年には、飛行船での北極横断をなしとげる。

CORBIS/BETTMANN/PPS

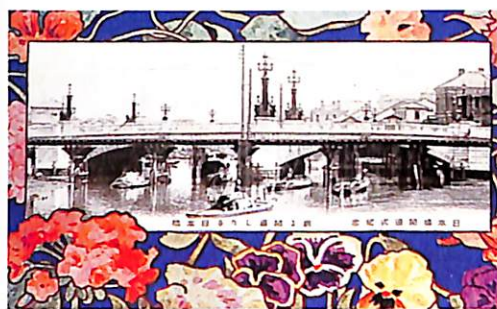
Popperfoto/ユニフォト・プレス(左1点とも)

▲1912年1月17日、南極点に立つスコット隊長(後列中央)と4人の隊員。彼らがそこで見たものは、ノルウェー国旗だった。

▲1911年1月、スコット隊を乗せ、南極大陸の上陸地点に到着した「テラ・ノバ(新しい土地)号」。随行カメラマンのポンティングが撮影した1枚。

美の出会い

「千両額」ポスターにPR誌 帝劇開場も広告メディアに "明日は三越"の宣伝戦略！

◀明治44年4月3日、新装日本橋の開通を祝って来店客に配られた、三越作成の記念絵はがき。上は大正3年に完成する本店の新築模型、下が石造りになった日本橋。

明治四四年に東京・日本橋の三越呉服店は、秋季大売り出し用のポスター図案を一般公募した。懸賞金は一等が一〇〇〇円、二等が二〇〇円、三等が一〇〇円、四等が五〇円（以上各一人）、五等が二五円（六人）と、合計額は一五〇〇円にものぼった。大学卒業したての初任給が三五円ほどだった当時、世間はこの賞金の額に注目した。そして画家たちにとっては、溜息の出るような魅力的な賞金だった。

この告示が出るやいなや、東京・神田にある画材店・文房堂では、応募に必要な画材がたちまちのうちに売り切れとなり、画家たちは美人のモデルをさがすのに苦心したという。締め切りの二月二〇日までに、日本国内はもとより朝鮮、台湾、満州（中国東北部）などから計三〇一点の作品が送られてきた。これを受けて三月二五日に店内の審査員による選考会が行われ、一等は満場一致で美人画の代表的作家・橋口五葉（三〇）に決定。以下二等は山田秋畝、三等は三間印刷所図案部、四等は岡吉枝、五等は山村耕花ほか五人が選ばれた。三越はこれらの作品を「千両額」と称して、四月一日から三階バルコニーに陳列し、一般公開した。

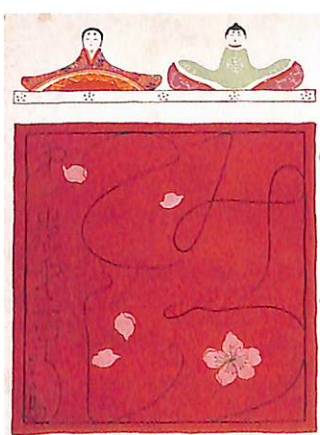
一等になった五葉の原画は、三越のポスターには不可欠とされる精巧な石版印刷技術を持つ三間印刷が、三五度も刷り重ねたという華麗なポスターに仕上がり、国内はもとより欧米にいたるまで配布された。美術的にも優れた三越のポスターは、銭湯や理髪店、旅館、料理屋などの店内のほか、駅の構内にも飾られ、人々の目を引きつけた。また店によっては、このポスターを飾ることを誇りに思うところもあったそうである。

このように三越が宣伝に力を入れるようになったのは、日比翁助の尽力によるところが大きかった。創業が江戸時代前期にさかのぼる三井呉服店は、明治三七年に三越呉服店と改名したのを契機に、三井銀行本店から派遣されていた日比取締役が専務取締役に就任。社長は空席だったため、日比が実質的なトップに立った。彼は三越発足の案内状で、三越呉服店をデパートメントストアーにするむねを宣言する。

その日比の活躍ぶりについて、三越資料編纂室の清水忠夫氏が語る。

「三越中興の祖と言われる日比翁助は、デパート経営のすべてについて優れたアイディアを出し、企画立案者としても奮闘していました。その一方で海外の要人たちを次々と日本に招き、民間外交家としても重要なはたらきをしたのです」

サービスと宣伝こそ百貨店経営にとって、最も重要なものであると考えた日比は、明治三八年に博文館の雑誌記者をしていた浜田四郎を宣伝の才能があると見抜きスカウトし、これを三越宣伝部の中心に据えた。次いで明治四一年には、後に日本のデザイナーの始祖と称されるようになる杉浦非水を専属嘱託社員として迎え、ここに三越宣伝の黄金時代を築く日比、浜田、杉浦の三人がそろったのである。

三越は明治三二年に、日本最初のPR誌と言われる「花ごろも」を創刊しており、その後何度かタイトルは変わるものの、明治四一年からは「みつこしタイムス」として刊行を続けてきた。しかし、「三越が発行するPR誌は営業の宣伝、案内にとどまることなく、学問、文芸、美術など文化全般にわたる啓蒙を旨とすべきである」（『三越85年の記録』）と唱える日比の考えを、さらに徹底するべく、明治四四年には新PR誌「三越」が創刊される。杉浦非水はこの「みつこしタイムス」「三越」の両PR誌の表紙を担当、アール・ヌーボー調の斬新なデザインで飾った。

▶この年三月に創刊された新PR誌「三越」。宣伝だけでなく、文芸・美術の紹介にもつとめた。アール・ヌーボー調の表紙は杉浦非水が制作。

▶帝国劇場のプログラムに掲載された三越の広告。「今日は帝劇、明日は三越」の名コピーにより、三越の名は都会の中流層に浸透していった。

この明治四四年には、もうひとつ三越にとって注目すべき出来事があった。二月一七日、丸ノ内に帝国劇場が落成したのである。三越はこの劇場の室内装飾から、非水のデザインによる緞帳をはじめ、もろもろのインテリア小物にいたるまで調製した。そして、この帝国劇場のプログラムには、浜田の名コピー「今日は帝劇、明日は三越」を配した広告が載ることになる。

都市部で新たに登場してきた中流層の文化的なステイタスと消費のスタイルの見本として、帝劇と三越が並べられた。来るべき大正文化の香りを先取りした宣伝企画の数々は、都市生活者の間に三越の名を広く浸透させていったのである。

▲橋口五葉の原画によるポスター。五葉はこの後、三越のライバル・白木屋にスカウトされ、三越の非水とポスターで競うことになる。 三越提供（見開き全点）

東芝科学館

「からくり儀右衛門」からロボット「タマゲッター」までの制御〝魔術〟の流れ

神奈川・川崎市

桑原茂夫

電気エネルギーを使って生活する日々――スイッチを入れるだけで必要なエネルギーが得られるなんて、究極の夢物語と言ってもおかしくないのに、今やそれが日常のありふれた出来事となってしまっている。そのため、夢物語を現実のものとする奇跡的な体験をしている最中でさえ、そこから驚きや喜びを得ることがむずかしくなっているのだ。

▲人工的に光を得る奇跡を、現実のものとしてきたランプの数々。 楠田守

しかし、たとえばこの東芝科学館の一角にある、歴史的な電球の数々が並べられているコーナーの前に立つと、失われた驚きや喜びがたちまち蘇ってくる。暗闇を一瞬のうちに明るく照らし出す点灯という行為や、ずっと明るい空間を作り続ける電灯そのものが、やはり奇跡であり魔術であると思わざるをえなくなる。

◀落ちてくる生卵を、砕くことなくソフトに受け止める、高度な制御システムを持つ実験的機械・タマゲッター。写真は生卵の代わりにボールを使ったもの。

▲高性能ロボットの曲芸。まわしたコマを、日本刀の刃の上で走らせる難度の高い曲芸をこなす。動きもスムーズで、ロボット技術が一段と進んでいることを教えてくれる。

東芝の祖とされている田中久重が、江戸末期から明治時代にかけて、ある種の魔術を見せるからくり師として活躍し、「からくり儀右衛門」という異名を世間からもらっていたのも、むべなるかな！ なのである。

東芝科学館には、その田中久重が開発・製造した、電気以前の技術成果も展示されている。「万年時計」(和時計のほか、西洋時計、天体の動きを示す盤などが搭載されている、要するに多機能の機械式時計である)や「無尽灯」(油を自動的に補給するランプ)などだが、その精巧さにおいて「からくり儀右衛門」の名にふさわしいものであり、田中流魔術の代表作となった。

ところで、「万年時計」はゼンマイのエネルギーを上手に制御して針を進めていたが、どんなエネルギーを活用する場合でも、それを制御する技術が大きなポイントになる。そして制御技術の粋を集めるとロボットができる。ゼンマイ仕掛けの時代には、それは時計であり、からくり人形だった。

東芝科学館の高性能ロボットは、ロボットコーナーにある一本のアームに六個の関節を持ち、それぞれが関連しながら人間の腕のように動く。ここではコマまわしの曲芸さえ、みごとにやってのける。機械をここまで細かく制御する技術に驚かされるが、この驚きは、さらに同じロボットコーナーにある「パワーエレクトロニクス技術」の展示を見て倍加する。

これは投げ上げた生卵が落下してくるのを受け止める機械で、これまでの常識では、卵は機械にあたって割れて砕けるはずだった。しかし、この機械は卵の落下速度や重さなどの情報をセンサーで捕らえ、その情報に基づいて、ふんわりと受け止められるように機械の動きを制御するというもの。この機械の愛称が、卵と驚きを掛け合わせた「タマゲッター」というのも〝ナットク〟なのである。

こんなに上手に制御できるようになっているということは、相当応用範囲の広いロボットが生まれる可能性があるということを意味している。それにしても、夢物語を夢の世界にとどめない人間のワザ(技でもあり業でもある)は底が知れない。そんな空恐ろしさを感じさせるミュージアムでもあった。

●東芝科学館
川崎市幸区小向東芝町一
☎〇四四－五四九－二二〇〇
JRなど川崎駅下車、市バス29番、東急バス27番より乗車、小向交番前下車、徒歩一分
開館時間＝九時～一七時
休館日＝土、日曜、祝日(第二、第四土曜と春・夏休み中の土曜は開館)
入館料＝無料

◀直径一五〇ミリ、長さ二〇〇ミリという、世界最小の水中ロボット。貯水タンクなど狭い場所での点検作業を可能にしただけでなく、レーザーで切断作業をすることもできる。

始まりは〝インテリのサロン〟だった 常連客は黒田清輝、鷗外、抱月、谷崎……「プランタン」開店で銀座にカフェー・ブーム！

▲「カフェー・プランタン」の店内。パリの「カフェー・ガボン」にならい、壁は文化人たちの落書きであふれていた。資生堂提供

岸田劉生らの若い芸術家が店作りにかかわり、演出家の小山内薫がフランス語で〝春〟を意味する店名の名づけ親になったという「カフェー・プランタン」。それは、パリのセーヌ川ぞいにあるカフェーを再現したいという、留学経験者たちの情熱の結晶だった。しかし、〝インテリのサロン〟として誕生したカフェーも、時代の流れの中で、新手の風俗の発信地へとその姿を変えていくのである。

洋画家・松山省三の情熱「パリ文化を伝えたい！」

京橋区日吉町(現・銀座八丁目)の一角――。桃色の壁にフランス製の石版画が飾られ、白いカバーでおおわれたテーブルや曲げ木椅子、蓄音機もおかれた店内では連日、ハイカラな雰囲気の若者たちが談笑していた。昼の一時頃から一人、二人と常連が集まり、夕方には数組のグループがつどう。これがこの店の来客パターンなのだが、〝インテリのサロン〟と呼ばれただけあって、新進気鋭の作家や芸術家も少なくなかった。

明治四四年四月に開店した「カフェー・プランタン」は、日本で初めて「カフェー」を名乗る店だった。経営者は洋画家の松山省三(二六)。開店したのは、「巴里情緒を東京へ移し出すのが目的」(「茶と珈琲」昭和三一年六月号)で、ミルクホールかビヤホールしかなかった東京で、パリの小粋なカフェーを再現したいと考えたのが始まりだった。

安藤更生の『銀座細見』によると、「後押には小山内薫氏など、マネージャ

▶神楽坂にあった「カフェー・プランタン」の支店は、慶応や早稲田の学生にこよなく愛された。写真はその外観。左端に立っているのが、経営者で洋画家の松山省三。

ーには近藤栄蔵氏がなった。今、ボル（ボルシェビキ）の大立物近藤栄蔵も、その頃は一番客扱いがうまかったという」

常連客は――黒田清輝（四四）、岡田三郎助（四二）、森鷗外（四九）、坪内逍遙（五二）、島村抱月（四〇）、谷崎潤一郎（二四）、鳩山一郎（二八）、五代目中村歌右衛門（四五）、初代市川猿之助（五五）など――そうそうたる顔ぶれ。店内は落書き自由とあって、当代きってのインテリが酔いにまかせて、壁に似顔絵や、「男の心を和らげたのは、女の甘い言葉ではなかった。それは暁の雨だった」といった歌を書き散らしていた。

料理はマカロニ、ハンバーグ、ローストビーフ、ポーク・ソテーなどの西洋料理がそろっており、二五銭前後。コーヒーは一五銭で、リキュールが二五銭だった

当時の事情について、珈琲文化研究会理事の星田宏司氏は次のように語る。

「本格的なコーヒー店としては明治二一年、上野に開店した『可否茶館』が先駆的存在でした。その後は、明治三八年に『台湾喫茶店』、明治四二年には横浜に『不二家菓子店』などもオープンしています。こうした中で登場した『プランタン』は、〝パリ文化を伝えたい〟という松山氏の願いもあって、特に文化サロン的要素が強かったようです」

後に松山自身が語るように、「フランス語のプランタンが、実に通用しなかった。プと発音するより、ブと云う人の方が多くて、出前を注文するにも、『ブランさん』なんて電話がかかってくる有り様」。女給の募集もひと苦労で、「（看板に洋風料理と出しても）ズブの素人の娘さんが、お母さん付き添いで来て『カフェーとは何ぞや』ときく　コーヒーや紅茶を運ぶ給仕と云われてビックリ仰天、中には『そんな所へは、おけませぬ』と怒って帰ってゆく人すらあった」（「喫茶街」昭和一〇年六月一日）

コーヒーと言えば、お湯に溶かす「珈琲糖」ぐらいしか縁のない明治の庶民にとって、カフェーは未知の世界だったのである。

松山政路提供（下1点とも）

◀「プランタン」でのパーティーの記念撮影。初め「プランタン」は、会費五〇銭の維持会員制をとっていた。永井荷風、北原白秋も会員だった。

◀44年8月、銀座・尾張町（現・銀座5丁目）に開店した「カフェー・ライオン」。30人もの女給のサービスで「プランタン」に対抗した。

喫茶派とキャバレー派に路線分化したカフェー

「プランタン」の評判に刺激を受けたのか、同年八月には、銀座に〝ウォー〟と吠えるライオンの仕掛けや美形の女給が人気を呼んだ「カフェー・ライオン」、大正元年にはコーヒー・チェーン店の先駆けにもなる「カフェー・パウリスタ」などが次々と開店。和服にエプロン姿の女給たちは、外で働く女性が少ない当時にあって、〝ワーキングガールの先駆者〟でもあった。

こうして誕生した頃は芸術家や文士の溜まり場だったカフェーだが、大正時代には大衆化の波が押し寄せた。特に関東大震災（大正一二年）以降は、銀座に「タイガー」といった大規模店が登場。と同時に、〝喫茶店とレストランの中間〟のような存在だったカフェーがこの頃には喫茶店、レストラン、クラブ・バーと性格を異にし始める。その中のクラブ・バー路線の店が〝客一人に女給一人制〟などの斬新なサービスを打ち出した大阪系カフェーの東京進出を受け、昭和初期になると〝エロ・グロ・ナンセンス〟の妖気を発散し始めるのである。

「大阪カフェの特色は第一にエロだ。大阪女給はエロ工場の熟練工である。イット喫茶ではどのお客もダアと参ってしまわざるを得ない」（前出・『銀座細見』）

ここで言う〝イット〟は、クララ・ボウ主演の米国映画「イット」（昭和二年）以来、性的魅力を意味するようになった流行語。「あの女給、イットがあるね」などとさかんに使われていた。

女給めあてにカフェーにかよっていた著名人の中には、「ライオン」のお久など多くの女給と浮き名を流した作家の永井荷風、お君という女給に入れあげて「タイガー」のナンバーワンにした菊池寛、なじみの女給に財布を預けて銀座で豪遊していた政治家の三木武吉らがいる。この頃、カフェーの女給の高収入ぶりを示す、こんな記事もある。

「驚くべき馬鹿数字。女給の月収三一八円――カフェー・バーは二月現在、（東京で）七九六〇戸。女給数は一万八五八二名。女給チップの収入を警察で調べると、愛宕署管内の最高は三一八円、象潟署の二一四円、錦町署の一九四円」（「報知新聞」昭和五年四月一五日）

さらに、カフェーの女給くずれの中からは、街頭で身を売る「ストリート・ガール」や、タクシーの助手席から男を誘う「円タク・ガール」、消毒ガーゼを使って接吻する「キッス・ガール」（五〇銭）といった新手の風俗の担い手が登場

明治末期に〝パリ文化を伝えたい〟という動機で誕生したカフェーは昭和の暗い世相に反動するように、ユーモラスなエロチシズムの巣窟となっていくのである

資生堂提供

▶明治末の銀座名物、資生堂のソーダファウンテン（ソーダ水やアイスクリームの売り場）

▶明治末に現在の日本橋小網町にでき、大正九年に京橋に移転したバー「メイゾン・鴻ノ巣」。文士たちの溜まり場だった。

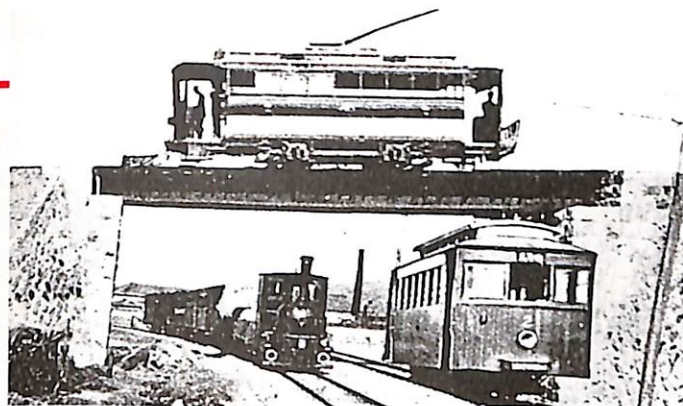
フォト＋日録で再現する365日

◀伊予鉄道、電化（8月8日）一番町―道後―古町間を改装。松山は明治21年に日本初の軽便鉄道開通以降、鉄道網が発達。翌月には松山電気軌道が開業（写真上）して、し烈な乗客争奪戦となった。

毎日新聞社

◀野口英世、梅毒スピロヘータの純粋培養に成功（7月8日）野口は北里柴三郎に師事して細菌学を修めた後、明治37年から米・ロックフェラー医学研究所に在籍。34歳。この成功で世界的名声を博した。

「グラヒック」

▲東京で電車市営化反対集会（7月8日）「万朝報」発刊の朝報社が主催。東京鉄道買収による財政圧迫を訴え、東京・日比谷に市民1万余人を集めた。写真中央が社主・黒岩涙香（周六）。しかし翌日、市会は市営化を決定した。

▲大日本体育協会、創立（7月10日）IOC委員だった嘉納治五郎を初代会長に、五輪への選手派遣機関として組織。写真は翌年、日本初参加のストックホルム五輪へ向かう団長の嘉納（50）。

▲インカ帝国のマチュ・ピチュ発見（7月）ペルーのクスコ地方、標高2500メートルの急峻な鞍部の遺跡を、米国のビンガムらが探索。15世紀末に発展し、スペイン人に滅ぼされた。

▶台風、東京を直撃（7月25日）深夜、暴風雨が荒れ狂い、東京湾岸の品川、洲崎遊廓などで浸水・家屋倒壊が続出、死者48人を数えた。写真は、越中島付近の陸に吹き上げられた水雷艇。

「グラヒック」

明治44年7月

1（土）●オペラの柴田（三浦）環、帝国劇場で独唱。●独砲艦「パンテル」、モロッコのアガディール入港（第二次モロッコ事件）。
2（日）●英・旗艦「ミノトール」、長崎港に入港。
3（月）●東京市参事会、電車市営化案可決（9日、東京市会で決定。この間、市内で反対運動）。
4（火）●大阪電気軌道、大阪平野と奈良盆地を結ぶ生駒トンネルの建設開始（大正3年に開通）。
5（水）●帝国学士院、第一回恩賜賞を木村栄に授与。
6（木）●神奈川県藤沢の遊行寺で「曼陀羅図」など焼失。
7（金）●日・米・英・露、ラッコ・オットセイ保護条約調印（一五年間禁漁）。
8（土）●公娼廃止組織「廓清会」、東京・神田で発会式。●野口英世、米のロックフェラー医学研究所で梅毒スピロヘータの純粋培養に成功。
9（日）●水戸興行中の大相撲宿舎に賊侵入、金品盗難。
10（月）●大日本体育協会（会長・嘉納治五郎）、設立。
11（火）●渋沢栄一らの猪苗代水力電気会社が認可。
12（水）●「大阪毎日新聞」に「家なき児」（菊池幽芳訳）連載開始（家庭に推薦すべき小説、と社告）。
13（木）●第三次日英同盟協約、調印。
14（金）●川崎造船所、独・マン社からマン型ディーゼル機関の特許使用権を日本で初めて取得。
15（土）●独、中央アフリカの仏植民地割譲を要求。
16（日）●第一回模型飛行機競技会、大阪・中之島公園で開催（9月、東京・早大運動場でも）。
17（月）●日米新通商航海条約、施行。
18（火）●京都帝大教授・岡村司、岐阜県教育会での講演で家族制度を批判し、訓告処分。
19（水）●災害土木費国庫補助規程、公布。
20（木）●英、議会法改正で下院の権限が拡大される。
21（金）●文部省、南朝正統論で国定教科書改訂を決定。
22（土）●幼児教育家・甲賀ふじ、表情重視の新しい舞踏遊戯体操を全国児童研究会で発表。
23（日）●田中海軍技師、世界の火薬事情視察終え帰国。
24（月）●清国、山東省の各鉄道・鉱山権を独から回収。
25（火）●建築中の九州帝大工科大学校舎が全焼。
26（水）●東京湾に暴風雨。深川では四〇人以上死亡。
27（木）●大蔵省、三〇〇〇万円の証券を発行。
28（金）●田中正造、洪水善後策で内務省に陳情。
29（土）●外務省、統合されていた取調局を独立設置。
30（日）●東北本線・山陽本線などで列車事故相次ぐ。
31（月）●文部省、中学校体操の正課に初めて「撃剣」「柔術」加える。

証言・あの日この日

夏目漱石（44）

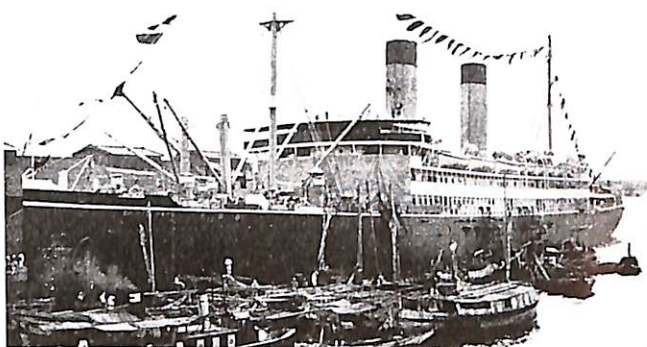
11月19日（日）〈昨日妻が机の前へ来ていふには「あなたなぞが朝日新聞に居たつて居なくたつて同じ事じやありませんか」「仰せの如くだ。何の為にもならない」と答えた。すると妻は「たゞ看板なのでせう」と云つた。余は「看板にもならないさ」と答へた。出たいといふものを何だ蚊だと云つて引き留めるにも当たるまいと思ふが、其処が人情か義理か利害か便宜かなのだらう〉（夏目漱石『漱石日記』）

漱石は、明治40年東大講師の職を捨てて朝日新聞社に入社し世間をアッと言わせたが、しかしこの頃「文芸欄」廃止をめぐって社内に対立が発生、この騒動で漱石の支援者で主筆の池辺三山が退社すると、漱石も辞職を決意する。が、前夜、漱石宅を訪問した政治部長・弓削田秋江に慰留され、辞職を思いとどまる。（山崎行太郎）

「グラヒック」

▲京城で李太王妃葬儀（8月2日）数万の群衆の見守る中、李氏朝鮮第26代の王・高宗の妃・厳妃の、古式を伝える葬列が徳寿宮から清涼里の墓地・永徽園に進んだ。

「グラヒック」

▶「春洋丸」誕生（8月31日）東洋汽船が持つ太平洋航路の豪華客船「天洋丸」「地洋丸」に続く船として進水。横浜港に全長約170メートルの、瀟洒優美な全貌を見せた。

▶英国でゼネスト（8月）港湾労働者や鉄道員らの労働争議でスト突入。リバプールでは電気が消え、ロンドンではバスがストップするなど、英経済は最悪の事態となった。写真は20万人が参加したというロンドンのデモ。チャーチル内相は国益無視と非難。

「イリュストラシオン」

▲初の速度測定競泳会、開く（8月18日）船と杭で東京・芝浦海岸の海を囲んでプールを作り、この中で競泳。220ヤードでは鵜飼弥三郎が2分32秒を記録。

「イリュストラシオン」

▶ポルトガル初代大統領にアリアーガ（8月24日）財政危機におちいった王党政府を打倒、共和国成立とともに共和派の重鎮として大統領に推された。71歳。

明治44年8月

1（火）●東京市、東京鉄道を買収し市電経営を開始。
2（水）●農商務省、造林統計規程公布。
3（木）●「社会新聞」（片山潜が明治40年創刊）廃刊。
4（金）●独社会民主党、政府のモロッコ政策に抗議。
5（土）●独、ハイチの内乱を理由に、巡洋艦「ブレーメン」を派遣。
6（日）●名古屋市会議事堂での海軍講演会で、太田海軍大佐が日本の海軍軍備は行き過ぎと演説。
7（月）●海軍大将・東郷平八郎、英国王戴冠式出席後に訪米、タフト米大統領と会見。
8（火）●日本傷害保険、旅行傷害保険切符を発売開始。
9（水）●南満州鉄道の工場が大連から沙河口に移転。
10（木）●東京で米の買い占め横行、農商務省が東京米穀商品取引所に八・九月期の取引中止命令。
11（金）●中外商業新報（現・日本経済新聞）、株式会社に（13日、「中外週刊画報」が「中外週報」に）。
12（土）●東京・両国の川開きが台風で延期、と新聞に。
13（日）●京都市電、敷設工事着工（大正2年完成）。
14（月）●東京帝大総長・浜尾新、枢密顧問官兼任に。●日露両国、サンクトペテルブルグにおける鉄道・汽船による貨物直通運輸協約に調印。
15（火）●夏目漱石、和歌山で「現代日本の開化」と題して講演行う。
16（水）●大阪・敦賀・下関の三港、樟脳輸送港となる。
17（木）●北西・北東ローデシア、南アフリカ会社の管理下に北ローデシアとなる。
18（金）●皇太子、北海道行啓のため上野駅出発。
19（土）●日仏通商航海条約、調印。
20（日）●東京・王子電気軌道、大塚―飛鳥山間が開業。
21（月）●警視庁、特別高等課を設置。
22（火）●ルーヴル美術館の「モナ・リザ」、盗難。
23（水）●上海で英字新聞「チャイナ・プレス」創刊。
24（木）●朝鮮教育令公布、日本語での教育体制整える。
25（金）●桂内閣総辞職（30日、第二次西園寺内閣成立）。
26（土）●日本政府、日露戦争の戦利艦「アンガラ」を露へ返還決定と露政府に通達。
27（日）●東京・千代田の両ガス会社合併決定で、独占化に反対し、東京各地で反対集会。
28（月）●東京・馬場先門と和田倉門の間を運行中の市電から出火、一人死亡。
29（火）●「東京朝日新聞」、「野球とその害毒」の記事を二二回にわたり連載開始（9月[illegible]日）。
30（水）●原敬、鉄道院総裁に就任（内務大臣と兼任）。
31（木）●仏露軍事協定が成立。

◀模型飛行機競技会（9月17日）国民新聞社が主催、東京・早大運動場で実施。7月の大阪に続いて2度目。速度・距離・高度などを、東大教授・田中館愛橘らが審査した。

「風俗画報」

▼上野公園に回遊飛行機登場（9月23日）支柱から伸びる鉄のアームに、奈良原式、日野式、ブレリオ式、ファルマン式4機のミニチュアを設置。電動でプロペラをまわした。

「風俗画報」

「イリュストラシオン」

▲イタリア、トリポリに進撃（9月29日）列強の北アフリカ植民地争奪戦に参加。トルコ軍を一斉砲撃し、沿岸都市を占拠。写真は、塹壕の死体を検分する海軍兵。

▶ロシア首相・ストルイピン撃たれる（9月14日）キエフで観劇中の事件。革命運動弾圧で恨みをかっていた。写真左は当日、首相が詣でていたキエフの皇族の墓。

「イリュストラシオン」（2点とも）

「太陽」

▲新渡戸稲造、南カリフォルニア大訪問（9月27日）第1回日米交換教授に選ばれて渡米、この日、歓迎式に出席した。写真右はポバード総長。新渡戸は48歳、一高校長・東京帝大教授を兼務。後、国際連盟事務局次長、太平洋問題調査会理事長などを歴任した。

▶ヒロイン「ノラ」に松井須磨子（9月22日）文芸協会が坪内逍遙会長邸でイプセン原作の「人形の家」を初演。島村抱月が演出して須磨子の魅力を十分に引き出し、自我に目覚めたノラがドアをバタンと閉めるラストシーンが、女性解放の象徴として評判を呼んだ。

明治44年9月

1（金）●青鞜社機関誌「青鞜」創刊。
2（土）●清国と京奉鉄道延長に関する協約調印。
3（日）●中国・広東で保路（鉄道国有化反対）大会開催（8月24日にも成都で開催、一万人参加）。
4（月）●米国・スタンフォード大初代総長のジョルダンが大隈重信邸の歓迎会で講演。
5（火）●東京・教文館印刷で一三八人が賃上げスト。
6（水）●英国人・バージェス、ドーバー海峡三五キロを二二時間三五分で完泳。
7（木）●仏詩人・アポリネール、「モナ・リザ」盗難犯人隠匿容疑で逮捕される（12月、無罪で釈放）。
8（金）●日露戦争に使用された下瀬火薬の発明者、下瀬雅允（6日没）に天皇が弔慰金下賜。
9（土）●英・ロンドン―ウィンザー間で初の航空郵便。
10（日）●スペインで労働全国連合（CNT）創立。
11（月）●大阪市会、市電運賃四銭均一案を可決。
12（火）●茨城・日立鉱山の鉛毒問題で、賠償求める五〇〇人が鉱山事務所に押し寄せる。
13（水）●日本貿易協会、社団法人の認可を受ける。
14（木）●露首相・ストルイピン狙撃される（18日死亡）。
15（金）●東郷平八郎、欧米から帰国。
16（土）●日本郵船、インドのカルカッタ航路を開設。
17（日）●米人・ロジャーズ、ニューヨーク―カリフォルニア州間の大陸横断初飛行出発（11月成功）。
18（月）●東京・青山斎場で画家・菱田春草の葬儀（二〇〇人におよぶ文学者が参列）。
19（火）●早大運動部、選手を侮辱したと東京朝日新聞記者をグラウンドから退場させる。
20（水）●日本綿花、中国・青島に支店開設。
21（木）●東京・白金の明治学院で出火、ヘボン式ローマ字で知られる宣教師・ヘボンの記念館が全焼。
●九州・霧島温泉、山津波で大被害。
22（金）●文芸協会、坪内逍遙邸でイプセン「人形の家」を初演（ヒロイン・松井須磨子が人気）。
23（土）●新渡戸稲造、米国で日本国民について講演。
24（日）●東京・浅草に建設の相撲常設国技館が上棟式。
25（月）●三越呉服店、文学者遺族援助の一環で、国木田独歩の未亡人を同店の取締役として迎える。
26（火）●帝国火災保険に設立認可。
27（水）●皇后、上野鋳金彫工会で陳列品を観覧。
28（木）●駆逐艦「海風」が舞鶴海軍工廠で完成。
29（金）●イタリア・トルコ間にトリポリ戦争勃発。
30（土）●英・マンチェスターで社会民主党とほかの社会主義政党が合同大会開催、英社会党を結成。

◀第1回ソルベー会議開催（10月30日）物理学の問題を討論する国際会議が提唱され、ベルギーのブリュッセルで初会合。プランク、ラザフォード、アインシュタイン、キュリー夫人らそうそうたるメンバーが参加。

ユニフォト・プレス

▶チャーチル（36）、英海相に（10月24日）自由党内閣で内相から転進。ストに軍隊を導入するタカ派の内相だったため、この人事は労働党を喜ばせた。

▼関森航路に日本初の貨車航送（10月1日）山口県下関—福岡県小森江間の関門海峡を、貨車3両を乗せる小型蒸気船が運航。大正8年には貨車7両搭載の「関門丸」に替わった。

▼東京・芝浦埋め立て地で地鎮祭（10月1日）隅田川河口の浚渫土で埋め立て地を造成、市の財源にあてる計画。第1期工事が終わり、芝金杉新浜町前で挙行。

「グラヒック」

▲辛亥革命始まる（10月10日）清国の半植民地化に対する不満から、湖北省の武昌で革命派の軍人たちが武装蜂起。革命の炎が全土に拡大した。写真は身の危険を感じ、上海に脱出する清朝高官たち。

「グラヒック」

▶柴田（三浦）環、帝劇でオペラ初出演（10月1日）「胡蝶の舞」で春の女神役。ファンが入り口に何重もの人垣を作る大人気。大正4年、「蝶々夫人」でプッチーニに激賞される美声を聞かせた。

明治44年10月

1（日）●白木屋デパート、日本初のエレベーター設置。
2（月）●京都・本願寺経営の真宗大学が真宗大谷大学と改称、京都帝大教授らを迎えて授業を開始。
3（火）●大蔵省、商法改正にともなう手形交換所を指定（東京・神戸・横浜・名古屋・広島）。
4（水）●清国、広東九龍鉄道が全通、開通式。
5（木）●伊軍、トリポリを占領（11月併合宣言）。
6（金）●朝鮮総督府、「専任総督論」掲載の「東京朝日新聞」を発売禁止に。
7（土）●米・ニューヨーク、洪水で六〇人溺死と新聞に。
8（日）●茨城県古河で儒学者・熊沢蕃山の奉告祭。
9（月）●万国廃娼同盟会の英委員・グレゴリー、来日。
10（火）●内外綿、上海支店設立（在華紡の中心に）。
●中国・武昌で革命軍武装蜂起。翌日、武昌全市を占領（辛亥革命の始まり）。
11（水）●文芸誌「白樺」主催、第一回泰西版画展開幕。
12（木）●中国革命軍が漢口占領。以後各省独立相次ぐ。
13（金）●東京・本所に芝居小屋建築許可、と新聞に。
14（土）●東京・神田駿河台の明治大学、新校舎落成。
15（日）●朝鮮・京元線、竜山―議政府間の営業開始。
16（月）●蚕糸業法の施行機関・蚕業取締所設置決まる。
17（火）●東京・築地活版所で一〇〇人が賃上げ要求スト（翌月、治安警察法で七人拘引）。
18（水）●大連・大清銀行で取り付け。二〇〇人が殺到。
19（木）●清国の革命騒乱に乗じた列国の兵器・弾薬売りこみ競争がさかん、と新聞に。
20（金）●山梨・甲府署、市内の不正米穀商を一斉検挙。
21（土）●東京・目黒の陸軍火薬製造所で火薬が爆発、一三人死亡。九人負傷。
22（日）●黒竜会派遣の北一輝、武昌へ。
23（月）●大蔵省、小銀行の合併整理奨励を通牒。
24（火）●天皇、教育勅語を朝鮮総督に下付。
●W・チャーチル、英海相に任命。
25（水）●片山潜ら、社会党を組織し結成届提出（27日結社禁止）。
●徳川大尉ら製作の陸軍初の国産飛行機が完成。
26（木）●大阪毎日新聞社の慈善病院、貧民施療開始。
27（金）●米国・ハリウッドに初の映画撮影所設立。
28（土）●茨城県水戸検事局へ護送中の容疑者が汽車から飛び降りて逃走。追跡のすえ、翌日逮捕。
29（日）●白瀬中尉の南極探検隊寄付募集と銘打ち、三田対稲門の有料野球試合。
30（月）●桂太郎らの発起で、日独協会創立。
31（火）●都筑式飛行機が試験飛行開始。

▲**ロジャーズ、飛行機で米大陸初横断(11月5日)**複葉機「パン・フィズ号」でニューヨークを出発して、49日目にカリフォルニア州パサデナ到着。写真は、スポンサーの広告。

▲**袁世凱、清朝の実権を掌握(11月16日)**総理大臣に就任、「憲法大綱」を発布。皇帝の権力を弱め、翌年には孫文と取り引き、皇帝退位と引き換えに中華民国臨時大総統に。

▲**与謝野寛、渡欧(11月)**「明星」廃刊後、発想の転換を求めて決意。翌年5月、晶子も後を追った。写真は送別会で。前列中央が寛。森鷗外、永井荷風、高村光太郎らが集まった。

▼**鴨緑江橋、完成(11月1日)**中国・安東と朝鮮・新義州間の鴨緑江に、長さ約1キロ、旋回開閉式の鉄橋が完成。南満州鉄道安奉線の広軌改築とあいまって、釜山からシベリア鉄道まで直結。

「グラヒック」

▲**歌舞伎座、新装オープン(11月3日)**外観は洋風で内部は和風だった様式を、3階建て純日本式宮殿風に衣替え。満席の初日、歌右衛門襲名披露口上のほか、「盛綱」などで深夜まで熱演が続いた。

毎日新聞社

▶**漁師1000人が公害抗議(11月1日)**青森県八戸に東洋捕鯨が設置した鯨解体場から作業排水が流れ、イワシ漁不振の原因は海水汚染にあるとして、解体場や誘致推進者・長谷川藤次郎の自宅を襲撃。

明治44年11月

1(水)●鴨緑江の橋梁完成、安奉線広軌開通により朝鮮総督府鉄道と南満州鉄道の直通運転開始。
2(木)●新潟・米山トンネルが崩落し列車が立ち往生。
3(金)●月刊「講談倶楽部」(講談社)創刊。
●新築なった東京・歌舞伎座、開場。
4(土)●仏、独との協定によりモロッコを保護領化、コンゴ植民地の一部は独に割譲。
5(日)●曹洞宗大本山・総持寺、焼失を機に石川県から神奈川県鶴見に移り、移転式挙行。
6(月)●香港の新聞が北京陥落との誤報号外を配布、市街で爆竹を鳴らすなどの騒ぎ起きる。
7(火)●斎藤兼次郎、幸内久太郎ら独立労働党結成(9日、結社禁止)。
8(水)●山本達雄蔵相の就任祝賀会が銀行集会所で。
9(木)●広東省が清朝から独立(各省で相次ぐ)。
10(金)●東京劇場組合、所属俳優の映画出演禁止決議。
11(土)●仏映画「ジゴマ」、浅草・金竜館で封切(犯罪場面が評判でヒットするが、後に上映禁止)。
12(日)●帝国学士院賞創設(翌年5月、高峰譲吉がアドレナリンの発見により第一回受賞)。
13(月)●新潟県柏崎の油紙工場で出火、七〇〇戸焼失。
14(火)●東上鉄道(現・東武東上線)設立。
15(水)●東京市、公設職業紹介所を浅草ほかに開設。
16(木)●清朝、袁世凱内閣成立。
17(金)●閣議、辛亥革命に対し清朝援助の方針決定。
18(土)●大阪・一心寺での川上音二郎(11日没)の葬儀で、妻・貞奴が卒倒、医師の手当てで回復。
19(日)●白瀬中尉ら南極探検隊、シドニーから再出発。
20(月)●大蔵省、銀行新設制限のため、地方長官に必要の有無について意見を具申すべきと通牒。
21(火)●南海鉄道、大阪・難波—和歌山間の電化完成。
22(水)●駐独大使・珍田捨巳、駐米大使に任命。
23(木)●大阪・大念仏寺の僧正ら七人、同寺の宝物類を盗み売却したのが発覚、逮捕される。
24(金)●駆逐艦「春雨」が三重県菅島付近で座礁沈没。
25(土)●栃木県庁が職員の羽織袴を全廃と新聞に。
26(日)●東京・王子の王子大橋が竣工し開通式。
27(月)●東京市役所内で元新聞記者の男がガス市営問題をめぐって市長を殴打。
28(火)●名古屋第三師団、北京出兵のため名古屋出発。
29(水)●奈良原式飛行機三号、所沢で距離六キロ飛行。
30(木)●清国各省代表者会議が漢口で開催、中華民国臨時政府組織大綱を採択。
●大蒙古国(モンゴル)、清国から独立。

「グラヒック」

▲**東京市電争議(12月31日)**旧東鉄の解散手当て金分配をめぐり、従業員の不満が爆発、社会主義者・片山潜らの指導で翌日まで全線ストが続いた。写真は、ストの始まりとなった三田車庫。

▼**キュリー夫人2度目のノーベル賞(12月10日)**ラジウム発見で夫とともに物理学賞を得た8年後、金属ラジウム単体の採取に成功、化学賞も獲得した。

ユニフォト・プレス

▼**外相・小村寿太郎葬儀(12月2日)**大臣官邸を出た葬列が、騎馬警官2騎を先頭に青山斎場に。11月26日没。56歳。この年2月、政府の宿願だった関税自主権回復の大任をはたした。

「歴史写真」

交通博物館提供

◀**余部鉄橋完成(12月)**兵庫県の日本海側、余部ー鎧駅間に、この頃の最新の技術を駆使、2年の歳月をかけ全長309メートル、高さ41メートルのトレッスル式鉄橋を建造。これで山陰本線は全通。写真は翌年1月の試運転。

▼**鈴木大拙、米人女性と結婚(12月)**仏教思想の世界的普及にいそしむ41歳の学徒の花嫁は、外交官令嬢。通訳をした鎌倉・円覚寺時代の兄弟子・釈宗演講演の聴衆の一人だった。

▼**頭山満、革命中国に渡る(12月)**上海で、犬養毅とともに孫文を激励。辛亥革命に頭山らのはたした役割は大きかった。写真は南京訪問の際、明の孝陵前で。左から3人目。

明治44年12月

1(金)●オランダのハーグで日・米など一二カ国が参加し、国際阿片会議開催。
2(土)●清国の政府・革命両派、停戦。
●名古屋の愛知織物会社で女性従業員四〇〇人が賃下げ反対スト。
3(日)●浅間山が噴火、前橋地方に多量の降灰。
4(月)●原敬、国勢調査準備委員会会長に就任。
5(火)●人気歌舞伎俳優の二代目市川左団次が東京・日比谷で結婚式。
6(水)●袁世凱、北京政府の全権掌握(摂政親王退位)。
7(木)●三菱・神戸造船所、社倉業務を開始。
8(金)●東京・麹町に双葉女学校の新校舎落成。
9(土)●浪曲師・桃中軒雲右衛門が初のレコード吹き込み(吹き込み料一〇〇〇円)。
●行財政整理のため臨時制度整理局を設置。
10(日)●M・キュリー、金属ラジウムの分離成功でノーベル化学賞受賞。物理学賞に次ぐ受賞。
11(月)●仏・英・露が一九一二年度の捕鯨禁止を決定。
12(火)●英国王・ジョージ五世、インドで、首都をカルカッタからデリーに移すと発表。
13(水)●山形・酒田遊廓で火災、消防士一一人が死亡。
14(木)●探検家・アムンゼン、南極点に初めて到達。
15(金)●東京・南千住で出火、四七戸全焼。
16(土)●三井合名鉱山部が独立して三井鉱山設立。
17(日)●樺太庁鉄道、東海岸線工事が完了。
18(月)●2Bテンダー機関車六七〇〇形が完成、運転を開始(国産蒸気機関車の量産の始まり)。
●ミュンヘンで「青騎士第一回展覧会」開催。
19(火)●大阪一帯に暴風雨、堂島川ぞい倉庫など浸水。
20(水)●三菱、高取鉱山(七二万坪)を譲り受ける。
21(木)●北海道・函館の日本郵船支店で出火、全焼。
22(金)●陸軍省、久留米第一八師団に清国出兵命令。
23(土)●玄洋社の頭山満、辛亥革命視察に出発。
24(日)●東京・九段の靖国神社神殿修繕終了、遷宮式。
25(月)●孫文、一六年間の英米亡命から上海に帰る(29日、中華民国臨時大総統に選出)。
26(火)●神戸市郊外、実業家・大倉喜八郎寄贈の敷地に伊藤博文の銅像完成、除幕式を行う。
27(水)●第二八回通常議会、開会(~翌年3月25日)。
28(木)●山県有朋、政府に陸軍充実急務の意見書提出。
29(金)●関釜連絡船が毎日二回定期発航に。
30(土)●仏、横線小切手(銀行のみに支払う)を公認。
31(日)●東京市電の従業員一〇〇〇人余、旧東京鉄道会社の解散手当て金を不満としスト。

俄楽多市（がらくたいち）

三面記事 "ジゴマ"が生んだワル志願

「ジゴマる」。圧倒的な人気を集めた活動写真「ジゴマ」を動詞化したもので、怪盗ジゴマのように行動すること。といっても、学校をエスケープしたり、女学生への付け文など、それまでも行われていたことが一括して、こう呼ばれることが多かった。

「女給」。三月にオープンした「カフェー・プランタン」が、新聞の三行広告で女性を募集する時に用いた言葉。当時は「女ボーイ」と呼ばれていたが、字あまりになるというので、女の給仕という意味で「女給」としたところ、たちまち広まった。

「突風」。女学生の間でヒジ鉄砲をくらわせること。この年の春、日本橋で突風が起こり、数人の通行人が倒れた。それが新聞で「ヒジ鉄砲をくらったように……」と報じられたところから、女学生の間に転用されるようになった。

▲東京の明治屋がキリンビールと提携し、このような専用販売自動車を使って、東京市内の顧客にビールの配達。

CM100年 新聞・雑誌CM「夜目遠目傘の中より美顔水 ――美顔水」（桃谷順天館）

美顔水（びがんすゐ）

夜目遠目傘の中より

夏が來て

▲化粧品を売るには、広告が勝負！？　沖田沖舟が描く純和風広告が話題に。

住 電話・喫茶室あり 浅草にハイカラ銭湯

浅草区田中町にできた銭湯が、安いうえに、ハイカラの先端をいっていると評判を呼んでいる。ほかの湯屋では二銭の料金が、半額の一銭也。おまけに、入り口には電話機を備えて、浴客の不意の用事に役立てているし、男女の脱衣所の隣には喫茶室と化粧の間があって、お茶や氷水などで浴客をもてなしている。

おかげで浴客がひきもきらず、近くの浴場はいずれも大恐慌をきたしているという。

〈「都新聞」[illegible]〉

◀青山朝音画の「除隊」というタイトルのマンガ。明治時代の青年たちにとって最大の喜びだった、徴兵満期を描いたもの。「笑」一一月一日号収録。

日本漫画資料館提供

食 「馬鈴薯は最下級」銀行総裁の怪意見

この頃、食の西洋化が進む一方、それへの反発も広がった。日本興業銀行総裁の添田寿一は、最近の馬鈴薯人気についてこう語った。

「馬鈴薯でも生活できないことはない。現にこれを食って生きている国民もある。しかし、馬鈴薯は人間の食物として最下級である。そこまでは落ちたくない。そこまで落ちたら、ほとんど亡国的と言ってよい」

〈「九州日日新聞」一〇月八日〉

▶明治末頃にはやったストライプの「シマウマ」水着。ノースリーブも登場。

毎日新聞社

はやり歌

浦島太郎

昔々浦島は
助けた亀に連れられて
竜宮城へ来て見れば
絵にもかけない美しさ
乙姫様の御馳走に
鯛や比目魚の舞踊
ただ珍しく面白く
月日のたつも夢の中
遊びにあきて気がついて
お暇乞いもそこそこに
帰る途中の楽しみは
土産に貰った玉手箱
帰って見ればこは如何に
元居た家も村も無く
路に行きあう人々は
顔も知らない者ばかり

文部省唱歌

▲子ども向けの「言文一致唱歌」をという運動で平易な歌が生まれたが、これを否定し、文部省主導の「尋常小学唱歌」が5月に刊行された。文部省唱歌である。

新どんどん節

詞　添田啞蟬坊

酒はもとより好きではのまぬ
逢えぬつらさに自棄でのむ
やめておくれよ自棄酒ばかり
弱いからだを持ちながら
あとの始末は誰がする
ドンドン
伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ
尾張名古屋は城でもつ
家のしんしょは嬶でもつ
嬶の襌は紐でもつ
紐のしらみはその皺でもつ
坊主の鉢巻耳でもつ
ドンドン
坊主だいて見りゃ可愛ゆてならぬ
何処が尻やら頭やら　現在の
坊主はナマグサ坊主　肉も食えば
酒も飲む　女をミダブツ法蓮経
ドンドン

▲浪曲ブームから派生した演歌。節目で太鼓をドンドンと打たせた浪曲師がいて、これを歌に取り入れた。写真の添田啞蟬坊のもののほかに、後藤紫雲のものもある。

▲脚絆に地下足袋、飛脚のようなスタイルで伊豆へサイクリング・ツアーに出かけた若者の記念写真。

毎日新聞社

三面記事 癌研究の一大進歩

アメリカの医師・ラウスによって癌の腫瘍ウイルスが初めて発表されたのは一九一一年である。ラウスは腫瘍を持っているニワトリを調べる機会があり、そのニワトリが死んだ時、ウイルスに感染しているかどうかを検査してみることにした。彼としては感染していないことに確信を持っていたが、実験によって確かめるのが賢明であろうと感じたのである。

ラウスは腫瘍をすりつぶし、それをウイルスより大きいモノは通さないフィルターにかけた。すると驚いたことに、フィルターを通過した濾過液は感染能力を持ち、健康なニワトリに腫瘍を生じさせたのである。彼はその報告書を一九一一年に発表した。そしてこれは「ラウス＝ニワトリ肉腫ウイルス」と呼ばれるようになった。このウイルスは、腫瘍ウイルスの仲間では世界で最初に発表されたものであった。

この研究によってラウスは、報告書発表後五五年経った一九六六年、ノーベル医学生理学賞を受賞した。

（アイザック・アシモフ『科学と発見の年表』）

文化 戦争実記が上位 この年のベストセラー

昨年（明治四四年）において最も売れた書籍は、水野広徳海軍少佐の『此一戦』（博文館）で、実に七〇版を重ねた。それを模倣してか、軍人の戦争実記が陸続と出版されたことは、特筆すべき新現象である。

書籍の売れ行きから見ると『不如帰』（明治三二年＝徳富蘆花）も軍人に縁あり、『肉弾』（明治三九年＝桜井忠温）も九二版を出して読書界を騒がせたが、今また、『此一戦』が不景気な出版界に、ひとり時を得顔に横行した。これらを見るに「ああ、世は軍国なるかな！」の嘆きを感じないでいられない。

〈「万朝報」明治四五年一月一日〉

◀一〇月、英雄、豪傑が主人公の講談本「立川文庫」創刊。第一編は一休（右）。

祭り 女性が真っ裸で泥水に 大阪のドブ水信仰

大阪・住吉大社の神輿が築港へ渡御のため運び出された後、参詣人によるドブでの水浴が行われた。境内に"亀の甲"と呼ばれる水溜まりがあり、真っ黒で汚ない下水が溜まっている。そこに飛びこんで、頭からこの下水をあびるのである。

この汚水は昔から"住吉様の御湯"と言われ、神輿渡御の前後にあびれば、腫れものやあせもに特効があるという。この日も近所のもののほか、紀州、河内、丹後などから来た客が一斉にあび、中には、うら若い娘が丸裸でドブの水浴をする場面も見られた。

〈「大阪朝日新聞」七月[illegible]日〉

この年の初もの

胃カメラ 英で実用化

●急速冷凍法　デンマークのオッテゼンが考案。

●ビタミン　ポーランドの生化学者・フンクが、米糠から抽出した成分をビタミンと命名。

●回転ドア　新装開店の白木屋（現・東急日本橋店）に登場。この時、デパート初のエレベーターもお目見え。

●水炊き　博多の本多治作が、中国の料理にヒントを得て考案。

●火山観測所　長野県大里村に浅間火山観測所がオープン。

▶跡見女学校の始業式後、白布で目隠しをして福引きする余興が行われた。

世界の動き

“ルーヴルの至宝”が2年間も行方不明に
ピカソ、アポリネールも犯人視された
世紀の「モナ・リザ」大盗難事件!

レオナルド・ダ・ヴィンチの最高傑作、世界の至宝「モナ・リザ」が盗まれた。フランスはもちろん、世界中が騒然となり、詩人・アポリネールや画家・ピカソまで容疑者とされた。そして二年後、「モナ・リザ」が姿を現したのは、“生まれ故郷”イタリアのフィレンツェだった。

◀「モナ・リザ」盗難を報じる、ミラノの「ラ・ドメニカ・デル・コリエーレ」紙。世界中でさまざまな推理・憶測が飛びかった。

「不可解! 驚くべき!」「モナ・リザ」が消えた!!

パリのルーヴル美術館から「モナ・リザ」が忽然と姿を消しているのが発見された。一九一一年八月二二日のことである。

この日、午前七時二〇分、美術館の守衛長・プーパルダンは、「モナ・リザ」がいつもの場所にないことに気づいたが、写真撮影のため館内のスタジオに運ばれたのだろうと考えた。午前九時、いつも「モナ・リザ」が掛かっている「四角の間」で模写をしていたルイ・ベルーがやって来た。しかし、おめあての絵が撮影中と守衛に聞き、辛抱強く待っていたが、昼頃、しびれを切らし、絵を早く戻すよう催促した。守衛は、数分もたたないうちに帰ってきた。

「絵はスタジオにはありません。そして誰もそれについて、何も知らないのです」

その日、館長のテオフィル・オモルはエジプト旅行中だったため、プーパルダンはエジプト館長のジョルジョ・ベネディットに知らせると、彼はすぐに、警視総監のルイ・ルピースを呼び出した。そして、一〇〇人にも達する選りぬきの警察官が、現場に派遣されたのである。

午後三時、見学者の館外立ち退きと、出入り口の閉鎖が命じられ、ようやく本格的捜査が開始された。

「モナ・リザ」は一六世紀初頭、ダ・ヴィンチが、フィレンツェの有力者、フランチェスコ・デル・ジョコンドの妻、リザをモデルに描いたと言われている。縦七七チセン、横五三チセンのポプラの板に描かれたこの世界の至宝を、フランス国民は「ラ・ジョコンド」と呼び、誇りにしていた。

捜査の手がかりは発見されなかった。水道管の破裂で急遽閉館になったと告げられた観光客はメインゲートにひしめき、新聞記者たちが駆けつけた午後五時三〇分には、大群衆に膨れあがった。

翌二三日、「ル・マタン」紙はこのニュースをトップ全段抜き見出しで「想像を絶する!」と報じた。他の新聞も「不可解! 驚くべき!」と書き立て、中には、「繰り返し一〇回読まないと、とても信じられない」という記事もあった。

警察には多くの情報が寄せられた。「あやしい男が、毛布に絵らしきものを包んで、ボルドー行きの列車に飛び乗った」「ある貴婦人の非常に珍しい絵を買わないかともちかけられた」などの話が相次ぎ、重要情報と引き換えに金を要求するものも現れた。

新聞社などが出した懸賞金めあてに、オカルティストや予言者も犯人捜しに躍起となった。そして「かなりの損傷を受けているが、そのうち戻るだろう」「けっして真相を暴けない国家機密である」などと、御託宣を並べ立てた。

捜査が進むにつれ容疑者も逮捕、取り調べを受けた。その中には、詩人・アポリネール(三〇)と若き天才画家・ピカソ(二九)も含まれていた。結局、彼らは一九〇七年に盗まれたルーヴルの美術品を所持していたものの、「モナ・リザ」盗難とは無関係として釈放される。

こうして有力情報は次々に消え、フランス国民は絶望の念を抱いたのである。

イタリア国民から英雄視された犯人

行方知れずの「モナ・リザ」が突然姿を現したのは、約二年後の一九一三年一二月、イタリアのフィレンツェであった。

持ちこんだのは、フランスに出稼ぎに行っていたイタリア人、ヴィンチェンツォ・ペルッジア(当時・三二歳)。彼は、以前ルーヴル美術館で額やガラスの修繕にたずさわったことのある、装飾職人だった。美術館の内部を熟知していたペルッジアは、一九一一年八月二〇日、見学者にまぎれ、仲間二人と館内に入ると物置部屋で一夜を明かし、翌二一日の休館日に計画を実行した。毎週その日は館内の整理・修繕日で、約二〇人の職人たちが、左官の作業やガラスの修繕に追われていた。ペルッジアらは用意しておいた作業服に着替えると、「モナ・リザ」の額を取りはずし、まんまと美術館の外に持ち出すことに成功したのである。

▶レオナルド・ダ・ヴィンチ「モナ・リザ」。一五〇三〜〇六年。板絵、油彩、七七×五三センチ。

ルーヴル美術館所蔵

◀「モナ・リザ」の画板の裏側。右上部の大きなひび割れが修復されており、こうした細かいデータが、本物か否かを証明する決め手とされた。

「イリュストラシオン」

▶「モナ・リザ」が掛けられていた跡。4本の鉄の釘のうち、下の2本だけが額縁を支えていた。「イリュストラシオン」

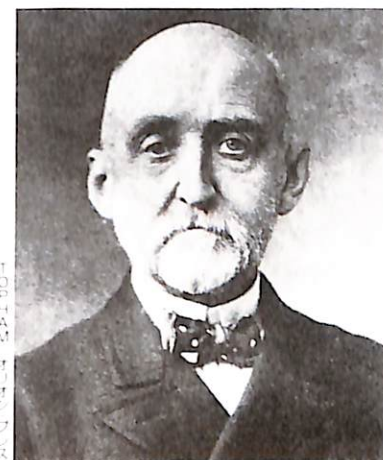
外から見たNIPPON

海軍兵学の大家・マハンが建議した日系移民の"脅威"

佐伯 修

この年六月、アメリカ合衆国海軍の退役少将、アルフレッド・マハン（一八四〇～一九一四）は、セオドア・ルーズベルト大統領に一通の書簡を送り、カリフォルニアなどで問題化していた日本人移民の流入について意見を述べた。この書簡の中で、英国の雑誌に載った「日本における移民問題」という論文を引き合いに出して言う。

「私はこの論文を全部読む時間がありませんでしたが、日本人移民は満州でも朝鮮（すでに一平方マイル当たり一五人います）でも、現地人の安い賃金と競争できない、というのが要旨です。どこが残っているでしょうか。オーストラリアとアメリカです。ここでは、彼らがアジアで不利だった以上に、オーストラリア人、アメリカ人に対し、安い賃金の優位さをもっています」（谷光太郎『アルフレッド・マハン』より）

マハンは、四年前の一九〇七年にも、雑誌編集者に「移民に対して門戸を開けば、ロッキー山脈の西のすべては、日本人やアジア人の国になってしまうでしょう」と警告、一九一三年には「ロンドン・タイムズ」への投書の中で、次のように述べている。

「これは黒人問題以上にやっかいなことである。というのは、日本人の剛健な資質は、将来も同化を拒み、日本人だけの地域をつくり、国益に関係なく彼らだけで行動し、絶えず（白人と）日本人との間に摩擦を起こし、現在以上に危険となるだろう」

日本から米国本土への移民が本格化しだしたのは、一九〇〇年頃からである。すでに一九世紀後半から、米国内には、プロテスタント系白人以外の移民を規制する動きが起こり、南欧系や中国系がその対象とされてきた。そして、日露戦争後、日系移民が集中したカリフォルニアなどで激しい排日の動きが起こり、日系学童らにも圧力がおよびつつあった。

一方、マハンは、海軍兵学の大家で、米海軍大学校の第二代校長だった。幕末の日本へ来航した経験もあるほか、日露戦争で海上戦を勝利へ導いた名参謀、秋山真之は直弟子であり、マハンの著書『海上権力史論』は、日本海軍にも大きな影響を与えた兵学の古典である。

しかし、マハンは有色人種と白人は別の世界で暮らすべきだ、とも考えていた。日本人に対しても、優れた点があるが、それだけ油断ならぬ存在とみなしていた。

一三年後の一九二四年成立の「排日移民法」は、結果的に日本国民の心に草の根的な反米感情を宿らせるきっかけとなる。

TOPHAM／オリオン・プレス

▲晩年「日米戦争計画」案に助言を与える。

その後「モナ・リザ」はパリ市内にある仲間のアパートに隠されていたが、ペルッジアは、「モナ・リザ」、そして自分の生まれ故郷でもあるイタリアに、この絵を持ち帰ることを決断したのである。

ペルッジアは二重底の木箱に「モナ・リザ」を隠し、フィレンツェの「トリポリ＝イタリア」（現・「ホテル・ジョコンダ」）という古びたホテルに運びこむと、古美術商に話を持ちかけた。

そこで、フィレンツェ美術界の最高権威であったウフィツィ美術館長・ポッジが鑑定した結果、本物と判明し、ペルッジアはあえなく逮捕された。

裁判で「レオナルドの傑作を祖国に戻したかった」と主張したペルッジアは、イタリア国民に英雄視され、留置所には葡萄酒やチーズなどが差し入れられたが、結局、懲役七ヵ月の判決が下される。そして、「モナ・リザ」は二年ぶりに無事ルーヴル美術館に帰ったのである。

「モナ・リザ」の盗難を機に、ルーヴルの守衛は一〇〇人から一八〇人にふやされ、警備は強化されたが、思いがけない波紋をもたらした。無事に返還されたことで、一九一四年に勃発する第一次世界大戦前夜、敵対するイタリアとフランスの間に、一時的にではあれ、友好の雰囲気をもたらしたのである。

「『モナ・リザ』は、これまで一九六三年と七四年にアメリカと日本に貸し出されましたが、ルーヴル美術館の絵画部長・ラクロットさんは、あの大盗難事件が頭をよぎるのか、もうフランスの国外に出ることはない、と断言したことを今もはっきりおぼえています」

こう語るのは、世紀の「モナ・リザ」盗難事件から七四年後の一九八五年、取材でルーヴル美術館を訪れた朝日新聞編集局次長の高橋郁男氏である。

現在「モナ・リザ」は、壁に取りつけた頑丈な防弾ガラスのケースに納められ、厳重に管理されている。

▲1913年12月、フィレンツェのウフィツィ美術館で、返還を前に公開された「モナ・リザ」。

ROGER・VIOLLET／ユニフォトプレス（二点とも）

▲世紀の「モナ・リザ」盗難事件の犯人、ヴィンチェンツォ・ペルッジア。

往きて還らぬ

▲11月11日　川上音二郎(47)
明治期の新派俳優で、寄席芸人時代「オッペケペー節」が大ヒット。明治29年川上座、後に帝国女優養成所を設立。

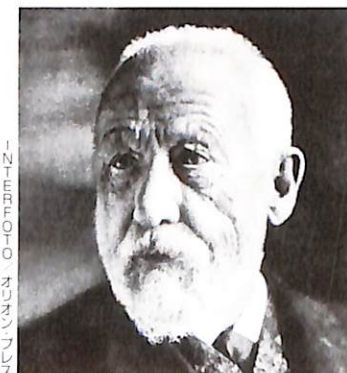
▲11月26日　小村寿太郎(56)
明治期の外交官。ハーバード大卒。米・露・清国各公使を歴任、明治34年外相。日露開戦を導く小村外交を行った。

▲12月3日　鳩山和夫(55)
明治期の政治家。明治25年政界入り、29年衆議院議長。外務次官の後、早大総長。妻は教育者の鳩山春子。

▲9月21日　J・ヘボン(96)
米の医師で、宣教師。1859年来日、横浜で医療所を開業し、名医と評せられた。ヘボン式ローマ字の考案者。

INTERFOTO／オリオン・プレス

▲9月22日　O・ケルネル(60)
独の農学者。1881年来日。東京帝国大学農科大学で土壌肥料・家畜飼育などを教え、日本の農芸化学の基礎を築く。

INTERFOTO／オリオン・プレス

▲10月1日　W・ディルタイ(77)
独の哲学者。ヘーゲルなどによる理性主義に反対し、「生の哲学」を提唱。現代思想にも大きな影響を与えた。

▲10月29日　J・ピュリッツァー(64)
米の新聞経営者で、他紙買収で財を築く。1917年、遺言により「ピュリッツァー賞」が創設された。

▲6月15日　大鳥圭介(78)
旧幕臣で、明治期の官僚。箱館・五稜郭の榎本軍に参加。後に清国公使、学習院院長を歴任。著書に『獄中日記』。

「グラビック」

▲9月12日　7代目市川団蔵(75)
幕末から明治期の歌舞伎俳優。明治30年7代目襲名。渋い芸風で、晩年劇界の重鎮に。当たり役に「先代萩」の仁木。

▲9月16日　菱田春草(36)
日本画家。明治三一年日本美術院創立に参加、以後同院の主力画家に。代表作に「落葉」「黒き猫」など。

▲1月20日　雨宮敬次郎(64)
甲州財閥の一翼をなした明治期の実業家で、鉄道事業に尽力。また長野県軽井沢を開拓し、雨宮新田の名を残す。

▲5月13日　谷干城(74)
明治期の軍人、政治家。土佐藩士の子。熊本鎮台司令長官、農商務相などを歴任。日本主義者でも知られた。

▶5月18日　グスタフ・マーラー(50)
オーストリアの作曲家で、オペラ指揮者としても人気を博す。交響曲一～一〇番（未完成）、歌曲などを残した。

週刊 YEAR BOOK 日録20世紀

第72号 7月21日(火)発売 定価560円 毎週火曜日発売 講談社 本体533円

1912［大正元年］

●特集
"時代の終焉"を飾った凄惨なフィナーレ 明治天皇崩御と乃木大将の殉死!/九日間で氷原を二八〇キロ踏破 白瀬隊二七人の果敢な南極探検!/浪速っ子が飛びついた娯楽の殿堂「新世界」と「吉本興行」が誕生!/一五一三人の犠牲者を出した処女航海 豪華客船「タイタニック号」の悲劇!

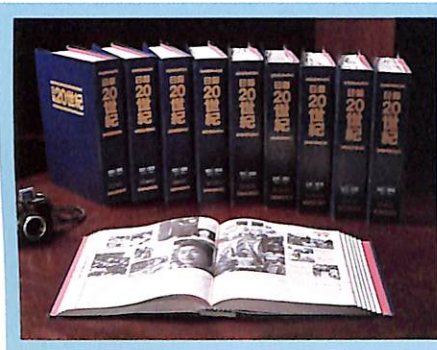
●ニュース・ファイル
フォト+日録で再現する366日…孫文、中華民国建国を宣言(1月1日)/松井須磨子主演「マグダ」、上演禁止(5月17日)/友愛会発足(8月1日)/日活設立(9月10日)/第一次バルカン戦争始まる(10月17日)/宮崎県で西都原古墳群を発掘(12月)/上原陸相、師団増設問題で単独辞表提出(12月2日)

●人物クローズアップ
"早熟な天才"石川啄木の悲惨な死

●決定的瞬間
"ラストエンペラー"溥儀が退位!

●美の出会い
高村光太郎ら第一回ヒュウザン会展開催

●女たちの肖像…魔術師・松旭斎天勝の"妖術"/勝者・敗者…三島弥彦、金栗四三の五輪初体験/証言・あの日この日…津田左右吉、谷崎潤一郎/「現場」を歩く…横川駅と長野新幹線/20世紀博物館…切手の博物館(東京)/外から見たNIPPON…独立運動家・金九と明治天皇崩御

●ベストセラー…谷崎潤一郎『刺青』、泉鏡花『歌行燈』/スターと名場面…「日本南極探検」/モノ語り'12…「ベス単」

日録20世紀専用バインダー

高級感あふれる特製バインダーを用意しました。「日録20世紀」を10冊ずつ年代順にバインダーにとじてそろえれば、「20世紀」ビジュアル百科のできあがり。10年ごとに分類するためのシールも添付しました。取りはずしは簡単で、整理にも便利、じょうぶな仕上がりです。あなたの書斎を飾るホーム・ライブラリーとして、永く保存してお楽しみください。バインダーは1部1300円(税別)。全国の書店でお求めください。

■既刊好評発売中(既刊71冊! 1920・1930・1940・1950・1960・1970・1980年代がそろいました)

一九三〇年代
第43号1931[昭和6年] 第44号1932[昭和7年] 第45号1933[昭和8年] 第46号1934[昭和9年] 第47号1935[昭和10年] 第48号1936[昭和11年] 第49号1937[昭和12年] 第50号1938[昭和13年] 第51号1939[昭和14年] 第52号1940[昭和15年]

一九四〇年代
第19号1941[昭和16年] 第20号1942[昭和17年] 第21号1943[昭和18年] 第22号1944[昭和19年] 第3号1945[昭和20年] 第23号1946[昭和21年] 第24号1947[昭和22年] 第25号1948[昭和23年] 第26号1949[昭和24年] 第27号1950[昭和25年]

一九五〇年代
第36号1951[昭和26年] 第37号1952[昭和27年] 第38号1953[昭和28年] 第39号1954[昭和29年] 第40号1955[昭和30年] 第41号1956[昭和31年] 第42号1957[昭和32年] 第6号1958[昭和33年] 創刊号1959[昭和34年] 第11号1960[昭和35年]

一九八〇年代
第53号1981[昭和56年] 第54号1982[昭和57年] 第55号1983[昭和58年] 第56号1984[昭和59年] 第57号1985[昭和60年] 第58号1986[昭和61年] 第59号1987[昭和62年] 第60号1988[昭和63年] 第10号1989[平成元年] 第61号1990[平成2年]

一九二〇年代
第66号1926[昭和元年] 第67号1927[昭和2年] 第68号1928[昭和3年] 第69号1929[昭和4年] 最新刊 第70号1930[昭和5年]

■今後の刊行予定

▶第73号1913[大正2年]7月28日発売
野口英世の栄光と錯誤●「宝塚少女歌劇」発足!●「大正政変」起こる●「T型フォード」大量生産へ

▶第74号1914[大正3年]8月4日発売
"東洋一"の東京駅、開業!●「東京大正博覧会」大成功●「身の上相談」欄登場●第1次世界大戦勃発!

▶第75号1915[大正4年]8月11日発売
「アラビアのロレンス」の実像●「ゴンドラの唄」大ヒット!●対中国「21ヵ条要求」●「ルシタニア号」爆沈

▶第76号1916[大正5年]8月25日発売
新兵器「タンク」出現!●葉山「日蔭茶屋事件」●労働者保護「工場法」の実態●怪僧・ラスプーチンの死

▶第77号1917[大正6年]9月1日発売
「目玉の松ちゃん」人気絶頂!●日本海軍、地中海遠征●マタハリ銃殺!●レーニン、「封印列車」で帰国

▶第78号1918[大正7年]9月8日発売
「シベリア出兵」軍、上陸!●「米騒動」勃発!●武者小路実篤と「新しき村」●スペイン風邪の猛威

バックナンバーはお近くの書店でお求めください。創刊号のみ282円(税別)です。直接弊社にご注文の場合は、冊数に関係なく送料200円のご負担となります。なお、代金と送料は先にお送りください。申込先 講談社読者サービス係 電話03-5395-3676

ミニ事典

1911年のキーワード

情意投合

日露戦争中頃から、長州閥官僚派の桂太郎と立憲政友会総裁・西園寺公望の二大勢力が、暗黙の了解のもとに相互協力し、円満に政権交代をはかってきたこと。一月二六日、桂首相が政友会議員に「情意投合し協同一致して以て憲政の美果を収むる」と話したことから一般的になった。翌年一二月、第二次西園寺内閣が、桂と陸軍勢力の望む二個師団要求を拒否したため、情意投合は破産した。

▶一月二九日、政友会代議士と会食のため精養軒に到着した桂太郎首相。

「グラビック」

関税自主権

国家がその主権に基づき関税制度を自主的に定め、運営する権利。日本は幕末の開国の際、列強の圧力に負け、税率変更に相手国の同意を必要とする「安政五箇国条約」を締結した。以降、その回復は歴代外務大臣の悲願となった。二月二一日、小村寿太郎外相の努力が実り、ワシントンで日米新通商航海条約とその付属議定書が調印された。これが日本の関税自主権回復の契機となった。

黒手組

セルビアの民族主義的秘密組織。正式には「統一か死か」。アピス(聖牛)と呼ばれたディミトリエビチ陸軍大佐を指導者に、現状に不満を持つ軍人らが、この年五月に結成。反ハプスブルクと全セルビアの統一を掲げ、一九一四年には第一次世界大戦を引き起こしたサラエボ事件で暗躍した。一七年、摂政・アレクサンダルの暗殺を計画したとしてアピスが逮捕・処刑され、組織は解体した。

文部省唱歌

戦前まで小学校の音楽教育の中心だった歌曲。この年五月八日、文部省が『尋常小学唱歌』として第一巻を編集。以降、大正三年までに全六巻が刊行された。「虫の声」「鯉のぼり」「水師営の会見」など。西洋音楽でありながら、ファ・シをのぞく八長調音階、二拍子の単純なリズム、美文調・教訓調の歌詞など、歌唱偏重を特徴とし、その後長く日本人の音感を支配し続けた。

維新史料編纂会

文部省が組織した明治維新史編纂機関。五月一〇日に官制公布。総裁・井上馨のほか委員を選任、六月に第一回会合を開催し範囲を孝明天皇の践祚した一八四六年から廃藩置県の明治四年(一八七一)と決定。委員を薩長中心の彰明会で固めたため、旧東北七藩などが協力を拒否する一幕もあったが、昭和六年、四一八〇冊分を脱稿、一七年以降は東大史料編纂所が事業を引き継いだ。

済生会

社会・経済不安を背景に設立された、窮民対策をおもな目的とする財団法人。二月に済生に関する勅語発布、五月三〇日、恩賜金一五〇万円と民間からの寄付金をもとに設立。初代総裁に伏見宮貞愛、会長に桂太郎首相が就任。無料または安価診療、巡回診療、病院設置などを継続的に実施、現在は社会福祉法人恩賜財団済生会として病院などを経営。

ラッコ・オットセイ保護条約

日・英・米・露四ヵ国間でラッコとオットセイの保護を目的に、七月七日、結ばれた条約。ともに良質の毛皮を産するため、一八世紀から一九世紀にかけて乱獲され、絶滅の危機にあった。翌年四月には、北緯三〇度以北の北太平洋における狩猟が一五年間全面禁止となった。ラッコは現在も捕獲禁止、オットセイは一九五七年の保護条約に受け継がれ、陸上でのみ一定量の捕獲が認められた。

廓清会

早くから娼妓の解放に取り組んできた日本キリスト教婦人矯風会、救世軍が四月の吉原大火を契機に、七月八日結成した廃娼運動の統一組織。大阪毎日新聞社社長・島田三郎が会長に就任、安部磯雄、山室軍平、鈴木文治、矢島楫子、伊藤秀吉らが中心メンバーとなった。廓清会は大正六年、大阪飛田遊廓設置に対し、認可した大阪府庁にデモを行い、飛行機からビラをまくなど猛烈な反対運動を起こして、世間の注目を集めた。

▲廓清会が大正末期から毎年秋に行った、廃娼を要求する廃娼デーの署名宣伝活動。

野球害毒論争

「東京朝日新聞」が八月二九日来、二二回連載した「野球とその害毒」記事をめぐって起こった野球是非論争。朝日は、学校が選手の成績に手加減を加えているとし、また一高校長・新渡戸稲造の「野球は相手をペテンにかけようとする巾着切の遊び」との発言を紹介、選手・擁護派を怒らせた。読売新聞社は九月に早大教授・安部磯雄らの野球支持演説会を開催して対抗、高まる野球熱を反映して、論争は大きな話題を呼んだ。

▲10月29日、超満員の観衆を集めて行われた三田倶楽部対稲門倶楽部の野球試合。

「グラビック」

在華紡

明治後期から昭和初期にかけて、中国で日本資本が経営した紡績業。在華紡績資本。内外綿株式会社が一〇月一〇日、上海支店を開設し一一月に工場を操業、その中心となった。その後、第一次大戦後の不況を背景に安い労働力を求めて東洋紡績、鐘淵紡績、大日本紡績などが上海・青島に次々に進出、「女工哀史」がそのまま持ちこまれたため、激しい反日・労働運動を呼び起こした。

大蒙古国

モンゴル人民共和国の前身 辛亥革命によって清朝が混乱におちいったのを契機に、一二月一日、独立を宣言、一二月二九日には聖俗の全権を握る皇帝の地位に活仏(フトクト)が就任した。清は当初、漢民族に対抗するため彼らを厚遇したが、漢人の入植を促進するなど次第に圧制が目立ち始め、民衆の反感を募らせていった。しかし、帝政ロシアの援助を仰いで独立を達成したため、その崩壊とともに列強の植民地争奪の標的となった。

週刊YEAR BOOK/日録20世紀 1911

CONTENTS

●編集
講談社総合編纂局
アート・ディレクター 山口至剛
表紙デザイン 山口至剛デザイン室(茂村巨利・渡邉裕)
本文レイアウト デザインオフィス八起き
編集協力 有エービーシープレス 株カマル社 株コミュニケーションハウス・ケースリー シト・プロ 有マックス 有マライカ 飯田守 小原伸夫 鍵和田良輔 菊地美優貴 小松邦宏 張替政展 藤森雅弘 結城順一 吉田忠正

●写真協力
石橋光子 大畑俊男 小熊和助 奥村敦史 北川太一 楠田守 近藤千浪 但馬一憲 平山亮 松山政路 吉田智恵男 INTERFOTO イリュストラシオン・プレス CORBIS BETTMANN TOPHAM PPS 平凡社 Popperfoto 毎日新聞社 マツダ映画社 ユニフォト・プレス ROGER VIOLLET 小熊写真館 資生堂 松坂屋 三越資料編纂室 明治屋 石橋財団石橋美術館 大阪市中央公会堂 大宅壮一文庫 ガス資料館 呉市企画部海事博物館推進室 交通博物館 東京芸術大学芸術資料館 東大三康図書館 自転車文化センター 国立国会図書館 東大図書館 東大明治新聞雑誌文庫 日仏会館図書室 日本カメラ博物館 日本共産党 日本近代文学館 日本女子大学成瀬記念館 日本漫画資料館 早稲田大学演劇博物館 ルーヴル美術館

本誌収録写真につき、所在不詳などのため事前連絡ができないものがありました。お心当たりの方は、編集部までご一報ください。
©講談社 1998 本誌の記事、写真を無断で複写、コピー、転載することを禁じます。